

Title	音声言語の研究15 （冊子）
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト．2020
Issue Date	2021-05-31
oa:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/85204
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

言語文化共同研究プロジェクト2020

音声言語の研究 15

安	部	麻	矢
郡		史	郎
韓		喜	善
山	本	武	史

大阪大学大学院言語文化研究科

2021

言語文化共同研究プロジェクト2020

音声言語の研究 15

安 部 麻 矢
郡 史 郎
韓 喜 善
山 本 武 史

大阪大学大学院言語文化研究科

2021

音声言語の研究 15

目次

安部 麻矢	マア語の地域方言と音韻交替について	1
郡 史郎	教会ラテン語のイタリア式発音の実態と発音解説書における 問題点	11
韓 喜善	韓国語母語話者を対象とした日本語のプロソディー研究再考(1)	29
山本 武史	A study on word-final vowel reduction in American English	34

マア語の地域方言と音韻交替について¹⁾

安部 麻矢

要旨 タンザニア北東部で話されているマア語 (Mbugu) には大きく分けて内マア語と外マア語のふたつの変種がみとめられる。そのうちの内マア語は言語接触の結果成立したと考えられ、近隣のバントゥ系言語とは異なる構造を持つ。もう一方の外マア語はパレ語と非常に類似している。本稿では特に内マア語に焦点を当て、音韻的特徴について概観する。

内マア語は近隣のバントゥ系言語にはみられない声門閉鎖音と無声側面摩擦音を音素として持つ。また、先行研究において、マガンバ方言とブンブリ方言とラングウィ方言では、内マア語の非バントゥ系の語彙の一部において音韻交替現象があることが報告されているが、筆者の調査の結果から、上記の3つの地域以外のいくつかの地域の方言でも同様の現象がみられることを示した。

1 はじめに

本稿では、タンザニア北東部でマア (Mbugu) の人々によって話されているマア語 (Mbugu, Ma'a とも) の変種とその地域方言にみられる音韻交替について概説する。

マア語 (Mbugu) はタンザニア北東部のタンガ州の西ウサンバラ山地²⁾のいくつかの分散した地域で話されている。これまでの研究において、彼らの言語には2つの変種³⁾がみとめられている。そのうちのひとつである内マア語 (Inner Mbugu) は、19世紀末より周辺のバ

1) 本稿で参照するデータは、筆者と研究協力者が2016年7-8月、2017年7-9月、2018年8月にタンザニアのタンガ州 (Tanga Region) ルショト県 (Lushoto District) での現地調査で収集したものである。コンサルタントはルショト県マガンバ (Magamba) 在住の Asha Mbaruku さん (1949年生まれ・女性) と Ester Nesala Waziri さん (1965年生まれ・女性) のほか、ルショト県のマア語話者のみなさんである。本研究は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究 (2)」の成果の一部であり、日本学術振興会科学研究費助成金 (特別研究員奨励費)「アフリカ諸言語の言語接触に関する記述調査研究—タンザニア・マア語の2変種を中心に」(課題番号: 14J40066 研究代表者: 安部麻矢) と同「タンザニア・マア語の2変種の社会言語学的記述研究—言語接触の視点から—」(課題番号: 17J0108 研究代表者: 安部麻矢) の助成を受けている。

2) 東西のウサンバラ山地およびその麓一帯の圧倒的な多数派民族はシャンバー (Shambaa) である。彼らの民族語であるシャンバー語 (Shambaa, G23) がこの一帯での優勢言語として話されており、マア語の人々はみな、シャンバーの人々とはシャンバー語で話す。一方シャンバーの人々のほとんどはマア語を理解することも話すこともできない。詳しくは安部 (2016) 参照。

3) このふたつの変種をそれぞれ個別の言語ととらえるか、ひとつの言語のレジスターであるかととらえるかが、これまでのマア語研究の主要なテーマのひとつとなっている。筆者は社会言語学的な状況から、それぞれ個別の言語としてみなすという立場を取っているが、本稿では「言語」ではなく、「変種」と呼ぶこととする。詳しくは安部 (2016) 参照。

ントゥ⁴系言語とは異なる構造を持つことが知られており、バントゥ諸語に見られる、名詞クラスと動詞類接頭辞との一致 (agreement) システムを持ちながら、非バントゥ系言語起源であると見られる語彙を多く有する⁵ことから、言語接触により成立したと考えられている。この変種は、20 世紀後半から言語接触の研究領域でしばしば取り上げられ、論じられてきた⁶。もう一方の外マア語 (Normal Mbugu, 以下 NM) は、バントゥ諸語のひとつであるパレ語 (Pare G.22⁷) と非常に類似しているといわれてきた変種であるが、1970 年代に入るまで詳しく言及されたことはなかった。これら 2 つの変種の構造を比較すると、形態統語法および名詞クラスの接頭辞や動詞類接頭辞などの形式はほぼ同一で、差異は主に語彙 (特に内容語) の面にみられることがわかる。Maho (2009: 97) はマア語をパレ語と類似点があるバントゥ諸語のひとつとみなし、内マア語を G20A、外マア語を G221 と分類している⁸。

Lewis et al. (2015) では ‘Mbugu’ の話者人口は 5000 人 (1997 年)⁹で、民族全体の人口が 32,000 人であるという推定値が報告されている。なお、推定値の推定方法は不明である。

本稿で参照するマアの人々の居住地は次頁図 1 の通りである¹⁰。また、次頁図 2 はタンザニア北東部の言語地図であり、特にマア語に関係があると思われる言語の分布を詳しく記している。

4) アフリカ大陸で話されているアフリカ固有の言語は、ナイル・サハラ (Nilo-Saharan) 語族、アフロアジア (Afro-Asiatic) 語族、ニジェール・コンゴ (Niger-Congo) 語族、コイサン (Khoisan) 語族の 4 つの語族に分類される。このうちバントゥ諸語は、ニジェール・コンゴ語族に属し、サハラ以南アフリカで広く話されている言語群である。アフリカの諸言語については、清水 (1988: 237-439) を参照。

5) 内マア語に見られる非バントゥ系の語彙については、アフロアジア語族のクシ語派南部クシ諸語に属し、タンザニアで話されているイラク語 (Iraqw) グループのほか、ナイル・サハラ語族の東スーダン語派東ナイル諸語に属し、ケニアとタンザニアの国境地域で話されているマサイ語 (Maasai) などとの類似が指摘されている (Meinhof 1906, Green 1963, Mous 2003 など)。

6) 詳しくは安部 (2016: 9-18) 参照。

7) バントゥ諸語の分類については、Guthrie (1967-71) の分類法が、その後のほかの研究者による新データの提示により多少の改善が加えられながらも、現在でも主流として用いられている。地域ごとに 15 のゾーンに分けられ、その中で二桁の数字によりさらに分類される。左から一桁目がゾーンの中で類似性により分けられた下位グループで、二桁目がその下位グループに属するそれぞれの言語に割り振られた数字である。パレ語は、G ゾーンの 20 (シャンバラ) グループの 2 番目ということである。先述のシャンバー語が G23 と、同じ下位グループに属しているので、近縁の言語で類似点も多いが、相互理解は難しい。

8) Maho (2009) の分類も注 7 で述べた Guthrie (1967-71) の分類方法に沿っており、さらにより詳しい分類をするために 3 桁目の分類も導入している。内マア語と外マア語に付した分類番号は、マア語をバントゥ諸語とみなしたうえで、内マア語と外マア語をそれぞれパレ語に類似した変種として分類していることを示す。分類法については Maho (2003) を参照。

9) 5000 人という話者人口について、どちらの変種の話者人口かの明記はないが、分類が「混合言語」とあるため、内マア語の話者の人口であると思われる。つまり、Lewis et al. (2015) が指す ‘Mbugu’ は本稿における内マア語のことであると推定され、本稿が指す Mbugu とは異なる。

10) マアの人々の居住地については詳しくは安部 (2016: 5-8) 参照。



図 1 マアの人々の居住地

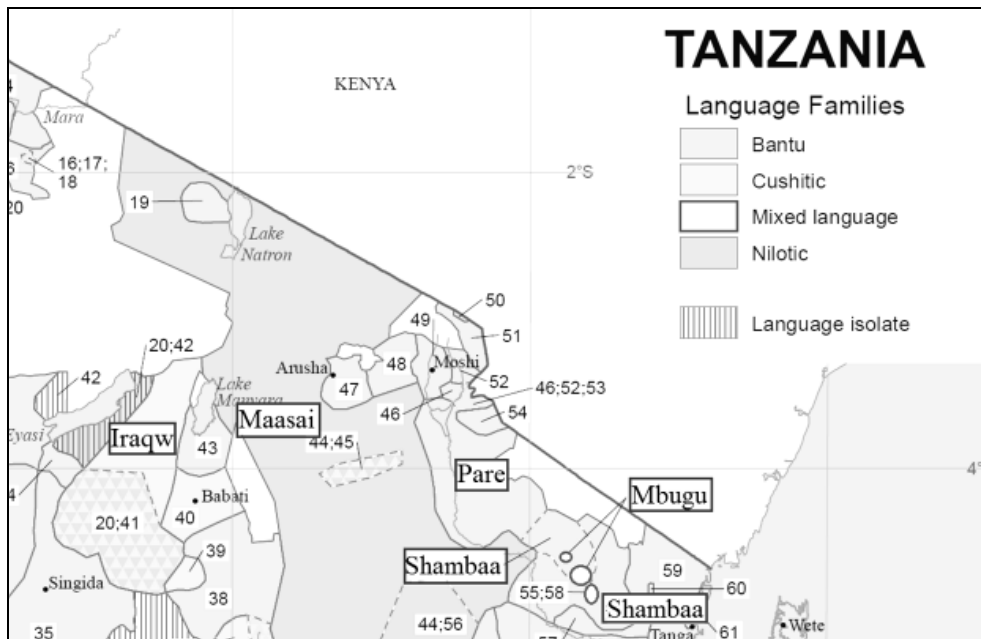


図 2 タンザニア北東部の言語地図

2 マア語の音韻的特徴

2.1 音素、音節

マア語の音素目録は次の通りである。右肩に * をつけた音素は、内マア語にのみみられるものである。

母音

A vowel chart showing the relative positions of five vowels. The vowels are arranged in a trapezoidal shape: 'i' is at the top left, 'u' is at the top right, 'e' is in the middle left, 'o' is in the middle right, and 'a' is at the bottom center.

子音

	両唇音	歯茎音	後部 歯茎音	硬口蓋 歯茎音	硬口蓋 音	軟口蓋 音	声門音
閉鎖音	p b	t d				k g	ʔ*
摩擦音	f v	s z	ʃ			x* ɣ	h
破擦音				tʃ dʒ			
鼻音	m	n			ɲ	ŋ	
接近音					j	w	
ふるえ音		r					
側面接近音		l					
側面摩擦音		ɭ*					

内マア語のみにみられる声門閉鎖音 ? と無声側面摩擦音 ɬ は、いずれも近隣のバントゥ諸語にはみられない音である。しかし、声門閉鎖音はクシ諸語全体に一般的にみられる音である¹¹。また無声側面摩擦音はイラク語にみられる¹²。内マア語において、声門閉鎖音と無声側面摩擦音は、バントゥ系言語に起源を求められない語彙にみられる。(1) は声門閉鎖音を含む語の例である。(1)a の maʔíba は、Kiessling and Mous (2003) が西リフトクシ祖語の *ʔiliba との類似を指摘しており、(1)b の mʔá は、Mous (2003) が東クシ諸語のダハロ語 (Dahalo)¹³ の ʕani との類似を指摘している。また (2) は無声側面摩擦音を含む語の例である。(2)a の mwála は、Mous (2003) がイラク語の ala との類似を指摘しており、(2)b の mlihé は、Mous (2003) がアラグワ (Alagwa)¹⁴ の leehee との類似を指摘している。

¹¹⁾ 中野 (1988) 参照。

¹²⁾ 例えば、*-hi:nl*「息をする」(Mous 1993: 25) など。

¹³⁾ アフロアジア語族のクシ語派に属しており、ケニアで話される、消滅の危機に瀕した言語である。

14) アフロアジア語族のクシ語派南部クシ諸語に属しており、タンザニア中央部で話されている。

- | | |
|---------------|--------------|
| (1) a. maʔíba | b. mʔá |
| ma-ʔíba | m-ʔá |
| NPX.CL6-milk | NPX.CL3-head |
| 「乳」 | 「頭 (単数)」 |
-
- | | |
|--------------|---------------------|
| (2) a. mwála | b. mlihé |
| mw-ála | m-lihé |
| NPX.CL3-fire | NPX.CL3-moon, month |
| 「火 (単数)」 | 「月 (単数)」 |

一方、外マア語にのみみられる音素はない。

また、内マア語・外マア語ともに、成節鼻音 m 、 n を持つ。音節構造は開音節 $((N)C(G))V$ と m 、 n である。

2.2 トーン

内マア語、外マア語ともに、ピッチの高低の対立がある。本稿ではこのピッチの高低をトーンと呼ぶ。内マア語、外マア語ともに、トーンは高 (H) と低 (L) の対立がある¹⁵。TBU (Tone Bearing Unit) は母音と成節鼻音であり、*contour tone* はない。トーンの対立のパターンは形態素によって決まっているが、形態素の中には固有のトーンを持たず、*spreading* によって隣接する要素のトーンの影響を受けるものがある¹⁶。また、名詞クラス接頭辞は全て L で現れるが、9/10 クラスの名詞クラス接頭辞 *N*¹⁷ の場合、TBU となる母音を持たず、後続する名詞語幹の初頭音 (阻害音) と合わせて前鼻音化子音となるが、名詞語幹の初頭音節のトーンが保持される¹⁸。これらのことから、マア語のトーンは音声的には H と L の対立であるが、音韻的には H と \emptyset の対立であると考え¹⁹。トーンの体系は内マア語と外マア語で若干異なると思われ、音韻配列が同一の語が、内マア語と外マア語とで異なるトーンを持つ例が多数収集されている²⁰。本稿のマア語のデータの提示においては、トーンについては音声レベル (実現形) での表記をする。

¹⁵ 本論文では、高トーン (´) のみを標示する。

¹⁶ 例えば、動詞派生接尾辞は固有のトーンを持たず、動詞語根末のトーンが *spreading* する。

¹⁷ 名詞クラス接頭辞の鼻音は後続する名詞語幹の初頭音 (阻害音) の調音点と有声性と同化する。

¹⁸ 例えば、

a. mbúka	b. mbalú	c. ŋkupe
m-búka	m-balú	ŋ-kupe
NPx.CL9/10-vegetable	NPx.CL9/10-lion	NPx.CL9/10-mite
「野菜 (単/複)」	「ライオン (単/複)」	「ダニ (単/複)」

¹⁹ H が *privative tone* であるとする考え方である。このようなトーンの音韻的な対立は他のパントゥ諸語にもみられる (Hyman 2001, Marlo and Odden 2019)。

²⁰ 例えば「8」を表す数詞は、内マア語では *mnané* であるが、外マア語では *mnané* である。また、「種 (単数/複数)」を表す名詞は、内マア語では *mbéju* であるが、外マア語では *mbéjú* である。

3 地域変種の音韻的差異

マア語のうち、内マア語には地域方言による語彙の差異がみられる。全く異なる語形のものが用いられている例²¹もあれば、音韻の交替現象がみられる例もある。Mous (2003: 99-102) は地域方言の間の音韻の交替現象について言及している。

3.1 マガンバ方言とブンブリ方言

Mous は内マア語のマガンバ方言とブンブリ方言において、一部の語彙に /k/ と /x/、/h/ と /x/ の交替現象があり、マガンバ方言の語彙で /k/ で現れるところがブンブリ方言で /x/ に置き換えられたり、マガンバ方言の語彙で /h/ で現れるところがブンブリ方言で /x/ に置き換えられたりすると述べ、21 例を挙げている。音韻交替が起こっている語彙はいずれも非バントゥ系とみられるもののようである。

これについては、筆者の調査でも同様の結果が得られている。(3) と(4) は、マガンバ方言とブンブリ方言にみられる、/k/ と /x/、/h/ と /x/ の交替現象を示す例である。(3) は/k/ と /x/ の交替現象を示しており、「卵 (複数)」を表す内マア語の語は、マガンバ方言では makokohá である一方、ブンブリ方言では maxoxohá である。

(3) マガンバ方言	ブンブリ方言
makokohá	maxoxohá
ma-kokohá	ma-xoxohá
NPX.CL6-egg	NPX.CL6-egg
「卵 (複数)」	「卵 (複数)」

また、(4) は /h/ と /x/ の交替現象を示しており、「木 (単数)」を表す内マア語の語は、マガンバ方言では m̥hatú である一方、ブンブリ方言では m̥xatú である。

(4) マガンバ方言	ブンブリ方言
m̥hatú	m̥xatú
m̥-hatú	m̥-xatú
NPX.CL3-tree	NPX.CL3-tree
「木 (単数)」	「木 (単数)」

3.1 マガンバ方言とラングウィ方言

Mous はまた、マガンバ方言とラングウィ (Rangwi) 方言の一部の語彙では、/k/ と /h/ の

²¹) 例えば、「子 (単数/複数)」を表す名詞は、マガンバ方言では m̥ʔiŋi/vaʔiŋi であるが、ブンブリ方言では ʔiŋi/vamílo、ラングウィ方言では ɲaxé/vamílo と、本来のマア語の語形成では説明がつかない (名詞は「名詞クラス接頭辞-名詞語幹」で形成される) 形式が収集されている。

ほか、/x/ と /h/ および /h/ と /x/ の交替現象があるとし、マガンバ方言で /k/ で現れるところがラングウィ方言では /h/ に置き換えられている例 (ikádo と ihádo、いずれも「10」) とマガンバ方言で /x/ で現れるところがラングウィ方言では /h/ に置き換えられている例 (ximéno と himéno、いずれも「鳥 (単数/複数)」) を挙げている。また反対に、マガンバ方言で /h/ で現れるところがラングウィ方言では /x/ に置き換えられる例 (mhá と mxá、いずれも「葉 (単数)」) を挙げている。

これらについて、筆者と研究協力者のこれまでの調査の限りでは、/h/ と /x/ の交替現象のほか、/k/ と /x/ の交替現象のデータを得ている。(5) の例が示すように、「血」を表すマア語の語は、マガンバ方言では sakó である一方、ラングウィ方言では saxó である。

(5) マガンバ方言	ラングウィ方言
sakó	saxó
Ø-sakó	Ø-saxó
NPX.CL9-blood	NPX.CL9-blood
「血」	「血」

Mous (2003) が報告している、/k/ と /h/、/x/ と /h/ の交替現象は、筆者と研究協力者の現地調査の限りではデータが収集されなかった。

3.1 その他の方言

筆者と研究協力者が 2017 年と 2018 年に行った現地調査では、マアの人々がまとまった数 (100 人以上) 居住すると報告されている地域を訪問し、それぞれの地域で複数名の話者を対象に基本的な語彙調査を行った。それによると、フイザイ (Fuizai)、クウェカンガ (Kwenkanga)、マリブウィ (Malibwi) という村 (図 1 参照) の話者から収集した語彙においても、音韻の交替現象がみられることがわかった。各方言の音韻交替の例をまとめると、次頁表 1 のとおりである。

	Magamba	Rangwi	Fuizai	Kwekanga1	Kwekanga2	Malibwi	Bumbli
血	sakó	háha ²²	háha	saxó	sahó	saxó	háha
木 (単数)	m̥hatú	m̥xatú	m̥xatú	m̥xatú	m̥hatú	m̥hatú	m̥hatú
卵 (単数)	ikokohá	ixoxóhá	ihóhóhá	ixoxóhá	ihohóhá	ixoxóhá	ixoxoá
10	ikádo	ixádo	ixádo		ixádo	ixádo	
割る	-xáʔa	-xáʔa	-xáʔa	-xáʔa	-háʔa	-xáʔa	-xáʔa

表 1 各方言の音韻交替例一覧

3.2 考察

表 1 が示すように、地域方言間の音韻交替は、それぞれの方言の中で統一して起こっているわけではないことがわかる。マガンバ方言を軸として他の方言の例をみると、例えばマガンバ方言と他方言における /k/ と /x/ と /h/ の交替については、マガンバ方言で /k/ で現れるところが Kwekanga 2 の方言では /h/ で現れると推測されるので、「10」を表す語は Kwekanga 2 の方言では ihádo となるはずのところが、ixádo である。また、マリブウィ方言では、マガンバ方言の /k/ は /x/ で現れると推測されるが、「木 (単数)」を表す語は m̥xatú ではなく m̥hatú である。それぞれの地域で多数の話者を対象にした聞き取りは行っていないため、これがそれぞれの地域で共通してみられるのか、個人の差によるものなのかは明らかではない。

これらの音韻交替について、Mous (2003: 101) はこれまでの文献に現れる内マア語の語彙を参照し、これらは通時的な音韻変化の結果であるかもしれず、/k/ > /x/ > /h/ という変化をたどっているのではないかと説明している。しかしながら、これまでの文献にみられる内マア語の語彙がそれぞれ同じ地域で採集されたものであるかは確認されておらず、本当に通時的な音韻変化が起こっているかどうかは明らかではない。また通時的な音韻変化であるならば、マア語の話者のコミュニティ全体で同じように変化してもよいと思われるが、現在のマア語の状況の限りでは地域によって差がみられ、また、語によっても変化に差がある。例えば、「木」を表す語には m̥katú という音韻交替の例はみられず、m̥xatú か m̥hatú であり、同様に、「割る」を表す動詞語根はほとんどの地域で -xáʔa であり、-káʔa という例はみられず、-háʔa という例もひとつの地域で収集されたのみである。Mous (2003) は筆者の調査で得たデータよりもより多くの例を収集し、分析しているので、筆者も今後さらなる調査により、より多くの例を収集し、検証する必要がある。

²²⁾ Mous (2003) は、sakó~saxó~sahó と háha について、もともとは前者は牛の血、後者はそれ以外の血という区別があったものが、次第にどちらも広く血一般のことを指すようになり、どちらを使うかで地域差が生まれたと説明している。

4 まとめ

本稿では、マア語の音韻体系を概観したのち、先行研究において報告されている、内マア語の非バントゥ系の語彙の一部にみられる、地域方言間の /k/ と /x/, /h/ と /x/ の交替現象について、筆者の調査によるデータから検証し、ブンブリ方言以外の地域方言でも同様の現象がみられることを示した。一方、この音韻交替はひとつの地域方言の中で統一して起こっているものではないこともみた。今後の調査においては、それぞれの地域でより多くの語彙を収集することと、より多くの話者を対象にした聞き取り調査と語彙調査によりをさらなるデータを収集することを今後の課題をしたい。

引用文献

- 安部麻矢 (2016) 『マア語 (Ma'a/Mbugu) の記述研究—文法と社会言語学的考察—』 京都大学博士論文。
- 清水紀佳 (1988) 「アフリカの諸言語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 『言語学大辞典』 第1巻, 237-439. 東京: 三省堂.
- 中野暁雄. (1988) 「クシ語派」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 『言語学大辞典』 第1巻, 1444-51. 東京: 三省堂.
- Green, E. C. (1963) “The Wambugu of Usambara.” *Tanganyika Notes and Records* 61, 175-188. Dar es Salaam: Tanganyika Society.
- Guthrie, Malcolm. (1967-71) *The Classification of the Bantu Languages*. London: Oxford University Press.
- Hyman, Larry M. (2001) “Privative tone in Bantu.” In Kaji, Shigeki, ed. *Cross-Linguistic Studies of Tonal Phenomena*, 237-57. Tokyo: ILCAA.
- Kiessling, Roland and Maarten Mous. (2003) *The Historical Reconstruction of West Rift Southern Cushitic*. Köln: Rüdiger Köppe.
- Lewis, M. Paul, Gary F. Simons and Charles D. Fennig (eds.) (2015) *Ethnologue: Languages of the World*. Eighteenth edition. Dallas: SIL international. <https://www.ethnologue.com> (Retrieved on October 15, 2015).
- Maho, Jouni Filip. (2003) “A classification of the Bantu languages: an update of Guthrie’s referential system.” In Derek Nurse, and Gérard Philippson, eds. *The Bantu Languages*. First Edition, 639-51. London and New York: Routledge.
- Maho, Jouni Filip. (2009) “NUGL online: the online version of the new updated Guthrie list, a referential classification of the Bantu languages.” https://brill.com/fileasset/downloads_products/35125_Bantu-New-updated-Guthrie-List.pdf. (Retrieved on March 24, 2021).

- Marlo, Michael R and David Odden. (2019) "Tone." In Van de Velde, Mark, Koen Bostoen, Derek Nurse, and Gérard Philippson, eds. *The Bantu Languages*. Second Edition, 150-71. London and New York: Routledge.
- Meinhof, Carl. (1906) "Linguistische Studien in Ostafrika, X: Mbugu." *Mitteilungen des Seminars für orientalische Sprachen* 9: 294-323.
- Mous, Maarten. (1993) *A Grammar of Iraqw*. Hamburg: Helmut Buske.
- Mous, Maarten. (2003) *The Making of A Mixed Language: The Case of Ma'a/Mbugu*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.

教会ラテン語のイタリア式発音の実態と 発音解説書における問題点

郡 史郎

要旨 教会ラテン語の標準発音であるイタリア式について解説した書籍類の説明は、それだけでは現実の発音を再現できない不十分なものがほとんどで、実際とは異なる内容も書かれている。本稿では標準発音としてのイタリア式の採用の経緯を整理し、1903 年以降の録音録画資料を使っておこなった調査の結果にもとづき実際のイタリア式がどのようなものかを報告する。調査の結果では、ほとんどの解説書が触れない「単語間の音結合」の説明が現実の再現には必要であり、“in excelsis” の下線部はカナ書きすれば[イネ]であって[インエ]ではない。“excelsis” は[エクチェルスィス]が多く、解説書が言う[エクシェルスィス]ではない。mihi は解説書が言う作想的な[ミキ]は一変種として存在するが、特にミサ曲では[ミー]か有声の h 音を使う[ミヒ]が多い。従来の解説書の説明はイタリア風ではあってもイタリア式の実態の説明と言えず、グレゴリオ聖歌の校訂に大きな貢献をした 20 世紀初頭のフランス・ソレム修道院の独特な説明を、実際の発音をよく観察しないまま直接間接に受け売りしたものかと思われる。

1. 研究の背景

ラテン語が使われる場面として現在多いのは歌唱においてである。カトリック教会での典礼として 1960 年代までの標準で、今もときおりおこなわれるトリエント式のミサでの歌唱（グレゴリオ聖歌）もそうだが、特に多いのは音楽としてミサ曲など宗教曲の形になったものを教会外で演奏する場合であろう。そうした場面での「教会ラテン語」の発音は通常のラテン語の教科書・参考書に記されているものとは異なる。本稿で扱うのも主にこれらの場面でのものである。

現在の世界のカトリック教会で典礼に使われる際のラテン語の発音は、おおまかには統一がとれたものと言えるにしても、こまかい点では一様ではなく、地域性を反映した多様なものがある。総本山にあたるローマの教皇庁でも、さまざまな地域の出身者がいるため、聞かれる発音は一様ではない。それは教皇であっても例外ではない¹⁾。

標準と考えられるのはイタリア式ともローマ式とも言われる発音で、主に音楽関係者向けにその解説書が数多く出版されている。たとえば典礼文の“Dona nobis pacem.”の最後を [pa:tʃem] [パーチェム] と読むのがイタリア式の特徴的な発音である。

しかし、イタリア人による発音がイタリア式発音だとするならば、そうした発音解説書の記述には強い違和感を覚える箇所がある。録音が聞けた 1903 年以降のものについて言えば、イ

1) たとえば南ドイツ出身のベネディクトゥス 16 世（在位 2005- 2013 年、1927 年生まれ）の発音は、ecce を [ektʃe] と言ひ、hoc の h を発音するなど、それまでのイタリア出身の歴代教皇とはすこし異なる、いわゆるドイツ式に近い発音がときに聞かれた。なお、本稿では教皇の呼び方はラテン語名で統一する。

タリア出身の歴代ローマ教皇の発音も、またイタリア人が歌う宗教曲の発音も、そうした発音解説書の記述と異なる点がある。また、解説書間で異なる発音が示されていることもある。そこで本稿では、標準としてのイタリア式発音の採用までの経緯を文献にもとづいて整理した上で、イタリア人による発音の実態はどうなっているかを録音録画資料を用いて検討する。

2. ラテン語発音のさまざま

日本でラテン語の教科書・参考書において発音として示されているのは、その発祥地であるローマの共和制末期から帝政期にかけての時代のものである。たとえば当時の政治家・思想家・雄弁家として知られる Cicero (紀元前 106—43 年) の名を [kikero:]²⁾ つまり [キケロー] と読むもので、ルネサンス期の人文学者エラスムスの 1528 年の著作に始まり³⁾ 現在も進行中の研究の結果として理論的に再構された古典式と呼ばれる発音である。

しかし、文法も発音も時代とともに変化する。すでに古典期からさまざまな発音があったことが当時の文筆家の記述や文書に反映された綴り方の混乱から知られる (たとえば Traina 1973)。そして、5 世紀の西ローマ帝国の崩壊に象徴されるローマの文化的求心力の低下とともに、日常の話しことばとしてのラテン語は旧帝国内の土地ごとに異なる形でどんどん姿を変えてゆき、最終的にそれが現在のイタリア語、フランス語、スペイン語などのロマンス諸語となる。

遅くとも 9 世紀には元のラテン語は一般大衆には通じないことばになっていた⁴⁾。しかし、ルネサンスの時代にかけて、典礼で使われる以外でも行政、司法、学術、文芸の世界での書きことばとして、限られた人間だけにだが使われ続ける。そしてラテン語を口に出す場合は土地ごとの発音でおこなわれることになる。国際的な交流や外交の場での口頭言語としても使われたようだが、発音の違いが大きいため相互理解に支障を生じる場合もあったようだ⁵⁾。ルネサンス以降は古典期の発音への回帰を目指す人も出たが、全体としては地域差は修正すべきものとはあまり考えられなかった。それどころか、発音を古典期風に変える動きが潰されたエピソード

2) /a/ 以外の母音の音価は短母音と長母音で少し異なっていたという推定があるが (短母音は長母音より開口度が高い [=上下に広い])、ここでの表記には反映させないでおく。

3) 用字法の検討や諸言語との比較を通じて、c (後続の母音にかかわらず [k]) や h (摩擦音)、母音間の s (無声)、二重母音 (分ける) などの古典期のラテン語の音価について、多くの点において現代における認識と同じ内容を示している。当時のヨーロッパ各地のラテン語の発音の実態を教えてくれる点でも貴重である。

4) カール大帝の時代の 813 年のトゥール公会議において、話す内容が理解されるように説教は (ロマンス系の) 俗語ないしゲルマンのことばにしておこなうことと規定された (Traina 1973, p.31 など)。

5) 16 世紀だが、イングランドのエリザベス女王 (在位: 1558-1603 年) がポーランド大使と外交案件に関して口頭でラテン語を介してやりとりしたというエピソードも知られる (J. M. Green 2000)。発音の違いについては、前掲のエラスムスの著作の最後に、神聖ローマ皇帝マクシミリアン (皇帝としての在位は 1508-1519 年) の面前でのヨーロッパ各地出身者によるラテン語のスピーチが、それぞれの出身地や他地域のことば風になまっているか、そのことばで言っているようにしか聞こえなかったというエピソードが記されている。Brittain (1934) はこのほか英語式の発音によるラテン語が相互理解の妨げとなったエピソードをいくつも紹介している。注 10 の最後に記す第 1 回のバチカン公会議でのエピソードも参照。

ソードさえ知られている⁶⁾。特にフランスでは自国風の発音への自負が強かったようだ。

その後ラテン語の使用は著しく減少したが、発音の地域差は今もあり、現在ヨーロッパの学校で教えるラテン語の発音にも国による違いがあるし、宗教曲の歌唱でも違いが聞かれる⁷⁾。

3. 教会ラテン語におけるイタリア式発音の公式採用と、そこで生じた問題

典礼のラテン語の発音も国ごとに違うという状況が20世紀の初頭まで続いた⁸⁾。この状況を変える大きなきっかけを作ったのが教皇ピウス10世（在位1903-14年，1858年生まれ）である。

同教皇は1903年の自発教令(motu proprio)において典礼における音楽のありかたの指示を出し⁹⁾，1912年にはフランス・ブルジュのデュブワ大司教への書簡で，典礼で使うグレゴリオ聖歌のラテン語の発音として歴史的にふさわしいとして，ローマで使われているものを推奨し（最初“celle qui est usitée à Rome”「ローマで使われているもの」と言い，後で“prononciation romaine”「ローマの発音」と言い換えている），それをフランス全土に広めるよう要請した¹⁰⁾。さらに1928年，

6) Traina (1973, p.34) と Brittain (1934, p.33) には16世紀にエラスムス式の発音への変更をめざしたイングランドやフランスでの試みが潰されたエピソードが紹介されている（Brittain にはフランスの例なし）。Traina によれば，これには宗教改革の渦中にあったことも関係するらしい。政治的にデリケートな問題と感じられたのだろう。また，権威への挑戦と受け取られた面もあるのだろう。

7) 現在イタリアでは高校でラテン語が教えられている。教科書では教会式（*pronuncia ecclesiastica*=イタリア式）と古典式（*pronuncia classica*）の2種の発音があることが紹介されるが，そのことへの言及は最初だけで，あとの説明はひたすらイタリア式の発音を使っておこなわれると言ってよい。いずれにしても発音の説明はごく簡単に済まされるだけである。フランスでは，高校で教えられる発音は1950年代までは伝統的なフランス式だったようだが，現在は古典式（<http://j.poitou.free.fr/pro/html/ltn/latin.html>）。ただ，学習者は少ないようだ。ドイツでは現在ラテン語の授業で教えられる発音は，伝統的なドイツ式を古典式に加えた折衷的な発音のようである（たとえば <https://www.planet-schule.de/wissenspool/das-roemer-experiment/inhalt/unterricht-latein/zur-aussprache-des-lateinischen-kommentar-textes.html>）。歌唱では伝統的なドイツ式やその変種が一定の勢力をもつが，全体としてイタリア式であっても *Abrahæ* を [アブラエ] ではなく [アブラヘ] のように歌う歌手もいる。

8) 理論的に再構された「古典式」の発音についてはおよそ全世界共通の認識があるため統一はとりやすいだろう。しかし，信教がローマ帝国で自由化され，ラテン語圏での典礼がもともとのギリシア語ではなくラテン語でおこなわれるようになったのは4世紀なので（http://www.vatican.va/news_services/liturgy/details/ns_lit_doc_20091117_lingua-latina_it.html），典礼で使われるラテン語の文章を，それらが作られ使われはじめる以前の「古典式」の発音で読むのはおかしいことになる。

9) <http://www.vatican.va/archive/ass/documents/ASS-36-1903-4-ocr.pdf> (p.329ff: 原文はイタリア語とラテン語)

10) <http://www.vatican.va/archive/aas/documents/AAS-04-1912-ocr.pdf> (p.577f: フランス語)。ただ，F. Brittain (1955 [2版] p.40)によれば，この手紙はデュブワ大司教自身や他のイタリア式発音推進をめざす人々の提案にもとづいて書かれたものと当時理解されていたようだ。しかし，要請の背景には，第1回バチカン公会議（1869-70年）からカトリック教会内で教皇への権力集中の流れが強まったこと，そして，教皇庁と一線を画そうとする傾向が強かったフランスの教会でおこなわれていたラテン語発音は韻律面も含めて崩れ方が大きく，聖歌の歌唱にふさわしいと思われず，また実際に耳からだけでは何を言っているのか理解しにくいものだったであろうこと，そして19世紀末からグレゴリオ聖歌の校訂を進めていたフランスのソレム修道院がみずからの歌唱にイタリア風の発音を採用し（1904年のソレム式の演奏について注12参照），1910年にはそれにもとづく発音解説書が出ていたこと（C. Couillault “La réforme de la prononciation latine”：未見だがソレムの聖歌校

その2代後のピウス11世（在位1922-39年、1857年生まれ）も、それが他国でも採用されるようにとの要望を記した書簡を同大司教に送っている¹¹⁾。

しかし、どちらの書簡でもそれが具体的にどのような発音かの説明はなされていない。ただ、デュブワ大司教は枢機卿となってパリに転じていた1922年に、ピウス10世の要請を実現すべく、みずからの教区の関係者への指示の書簡という形で文書を出版し(Dubois 1922)、そこでローマの発音を使うよう命じ、その付録として文字と読み方の対応表を語例とともにつけている。

その内容は、後述するhとxceの読みの特異性も含め、19世紀末からグレゴリオ聖歌の校訂を進めていたフランスのソレム修道院が編集した聖歌集、通称“Liber Usualis”(イタリア式でカナ書きすれば「リベルズアーリス」)の1920年のフランス語版にある発音解説とほぼ同じである。文書にソレム修道院への言及もあることから、その発音解説を借りてきたものと考えられる¹²⁾。

一方、“Liber Usualis”ではピウス10世が勧めるローマのものとして発音が説明されている¹³⁾。しかし、この発音解説にはhとxceの読みが特異という問題があり、イタリア風ではあっても厳密にはローマなどイタリアの実態とは異なる独自の「ソレム修道院式」と言うべき発音になっている。また、あいまいで真意がわからない説明もある。

“Liber Usualis”はバチカン公式の聖歌集ではない。しかし、公式版の編纂にもソレム修道院があたったことや上記のような経緯があったため、公式版にはないソレム修道院の解説が正しく権威あるものとする人が、デュブワ大司教自身を含めイタリアの発音の正確な実態に詳しくない人には多かったであろう¹⁴⁾。主に音楽関係者向けに宗教曲のラテン語をどのように発

訂の中心人物のひとりポチエ師が序文を書いているようだ)があると思われる。ピウス10世の要請がフランス語での書簡の形をとり、官報である使徒座公報に残したのも、多くのフランス人の目に入りやすくするためだろう。この要請に対してフランス国内では反発が1929年まで続いたが、最終的には全国の教会で採用された(Marouzeau 1943, p. 18)。なお、当時のフランス式の発音をよそ者が理解することのむずかしさについては、ラテン語でおこなわれた第1回バチカン公会議で、ある熱心な教皇派のフランス人司教の発言中にイタリア人司教から理解できないとの声があがったが、それに対しそのフランス人司教は“Gallus sum, et Gallice loquor.”(自分はフランス人であり、フランス風にしゃべっている)と、ゆっくり、精一杯のイタリア式発音を使って返したとのエピソードが、G. Buttler (1930)の著書を引用する形でBrittain (1934: p.26)に記されている。

11) C. Eichenseer (1963, p.3)にラテン文が、G. Suñol (1930, p.205f)に英語訳がある。

12) “Liber Usualis”の初版は1896年だが発音解説はない。1920年版と同じ発音解説がソレム修道院の聖歌校訂の中心人物のひとりモクロ師の著書(Mocquereau 1927)にあり、それは同修道院の“L'exacte prononciation romaine du chant grégorien basée sur les principes de l'émission vocale”という出版物をもとにしているとあるが(p.68)、出版年不明(未見)。同書では1910年以降刊行の他の5点の解説書も紹介されているが、いずれも未見。しかし、モクロ師自身の指揮による1904年の聖歌歌唱はその発音どおりのようなので、それ以前、おそらく1896年には同修道院の発音は定まっていたと思われる。演奏は以下のWEBページで聞け、録音経緯も知ることができる。<http://gregorian-chant.ning.com/group/enregistrements/forum/topics/le-congres-gregorien-de-1904>

13) 1934年以降の英語版には“the living liturgical Latin of the Church”「現行の教会ラテン語」の発音ともある。

14) ピウス10世・11世もイタリア式を推奨するにあたってソレム修道院の発音のことは当然念頭にあっただろうが、どこまでこまかくその内容を把握していたかはわからない。確実なのは、上述の書簡では「ローマで使われているもの」を推奨したのであって、ソレム式を推奨するとは言っていない。

音すればよいかを解説した書籍や文書が日本語も含め数多く出ているが、そのほとんどは h と xce についてソレム式で説明しており、ソレム式を直接間接に受けついでものになっている。

実態ということでは、ピウス 10 世自身の発音は聞けていないが、同教皇はイタリア半島北部の出身であり、北部風のイタリア語の発音をラテン語に反映させたものであつたろう。ピウス 11 世も北部出身だが、同教皇を含め、ピウス 10 世と世代に近いピウス 12 世（在位 1939-1958 年、1876 年生、ローマ出身）、ヨアンネス 23 世（在位 1958-1963 年、1881 年生、北部出身）が残したラテン語の録音を聞いても、それぞれの出身地のイタリア語の発音傾向を反映したものになっている（[s] の二重子音と [j] の長さ、母音間の s が有声か無声か：音源は稿末に示す）。したがって、ピウス 10 世や 11 世が言う「ローマの発音」というのは、ローマの町に限られた発音ということではなく、教皇（1523 年から 1978 年までずっとイタリア出身）がいるローマの教皇庁を中心に、イタリア各地で多少の変種を包括しつつおこなわれていた発音を指すと考えるのが妥当であろう。当時は政治的にイタリア王国と対立していたために「イタリアの発音」と言わなかったのかもしれないが、以下ではこれを指して「イタリア式」と呼ぶことにする。ミサ曲は典礼文に音楽をつけたものなので、その演奏においても発音はイタリア式が標準になると思われる¹⁵⁾。

20 世紀にはイタリア的な発音の普及が進んだ。Brittain (1934) は主に英国におけるラテン語発音のありかたの変遷を記した著書の冒頭で、イタリア式がヨーロッパ大陸でもイギリスでも盛んになりつつあると言い、その背景のひとつとしてラジオ放送という要因をあげている¹⁶⁾。

4. イタリア風の発音を解説した書籍類の説明内容と問題点

上述の自発教令以降に主に音楽関係者向けに刊行された発音解説の書籍や文書類のうち、今回参照できたのは、英語によるものが 9、フランス語とドイツ語が各 1、日本語 7 である（まったく同内容のものはのぞく：稿末に一覧を示す）。このうち、ドイツ語の V. Scherr (2010) は歌手や合唱指導者等へのインタビューと実態観察にもとづく研究書という性格が強いため別扱いする。

これらの書籍類で古典式の発音との違いが問題となる箇所について見ると、説明がほぼ共通している点と異なる扱いが目だつ点がある。また、どれにも触れられていないことがらもあるし、説明がほぼ共通しても正確性に疑念が持たれる箇所もある。

解説書類でほぼ共通と言えるのは、文字 æ (ae), c, ch, g, gn, h, œ (oe), ph, qu, sc + 母音字, th, ti + 母音字, v, xce, y, そして二重子音の音価の説明である¹⁷⁾。

15) ただし、バッハ、ベートーベン、シューベルトなどドイツ語圏だけで活動した作曲家のラテン語の宗教曲を演奏する場合は、作曲家自身がイメージしたであろうドイツ式発音を使うのがよいという考え方もある。

16) Radio Vaticana（バチカン放送）の開局が 1931 年 2 月で、開局当日にグッリエルモ・マルコーニのあいさつに続いて教皇ピウス 11 世がラテン語によるメッセージを世界に向けて流した。同局の番組にはラテン語によるものがあり（<http://www.memoriafidei.va/content/dam/memoriafidei/documenti/Cocco%20-%20Relazione.pdf>）、Brittain の説明はそれらがイタリア以外にも一定数の聴取者を持っていたことを示すのではないと思われる。同年 11 月には Radio Trieste がミサ（当時はラテン語）の放送を始めている（https://www.treccani.it/enciclopedia/voci-e-immagini-della-fede-radio-e-tv_%28Cristiani-d%27Italia%29/）。

17) æ は [e], c は [k] または [ç]（後続母音が a, o, u か i, e かで決まる）、ch は [k], g は [g] または [dʒ]（後続母

そして、問題があると感じられる箇所は以下のとおりである。なお多くの解説では国際音声記号は使われていないが、以下では主にその形に直して[]内に示し、必要に応じてカナを使う。

- (1) どの解説も文字や単語をどう読むかを説明しているだけで、句や文としてどう発音するかにまったく触れられていない点。特に単語間の音結合現象の無視。
- (2) 文字 h について、ほとんどの解説書類は mihi (私に) と nihil (何も[何でも]ないこと) の 2 語を例外としてその他は無音とするが、疑義があるのはこの 2 語の h を [k] で発音させる点。
- (3) ほとんどの書籍類で xce を [kʃe] と発音させる点 (たとえば excelsis を [エクセルシス])。
- (4) 単語の内部で母音にはさまれた s と x の発音。
- (5) 母音字 e と o の発音が広いか狭いか。
- (6) その他。

以下、問題点を個別に説明し、5 節でそれらについて録音録画資料で検討した実態を示す。

4.1 句や文としての発音、特に「単語間の音結合」の無視

重要性が高いと思われるのが、たとえば聖歌 Gloria の “Gloria in excelsis Deo”, Credo の “Pater omnípotens”, “et terræ”, Dies irae の “Et ab haedis” の下線部をどう読むかという問題である。

Scherr (2010) 以外、句や文の中で単語がつづくときの発音にはまったく触れられていないが、単語と単語のあいだに生じうる 2 種類の音結合現象のことを考える必要がある。

そのひとつは、ここで「^{しほいん}単語間の子母音結合」と称する現象である。たとえば、英語で “Good afternoon.” は Goo dafternoon, つまり [グダフタヌーン] であるかのように言うのがふつうであり, “in an instant” (一瞬で) なら, i na nstant, つまり [イナニスタント] のように言うことが多い。英語では「リンキング (linking)」と呼ばれる音結合の一種だが、フランス語では「アンシェヌマン (enchaînement)」と呼ばれる。

イタリア語では単語間で子母音結合をさせるのが当然になっているので、たとえば “Buon appetito.” (食事開始時のあいさつ) や “con un amico” (男の友だちといっしょに) は、ていねいに 1 語ずつ切りながら言いたい特別な事情がないかぎり [ブオンアッペティート] ではなく buo nappetito [ブオナッペティート], そして [コンウンアミーコ] ではなく co nu namico [コヌナミーコ] と言う。つながずに各単語を別々に言うと、ふつうの自然な発音ではなくなる。

この傾向を強く持つイタリア人が発音するラテン語にも同じことが生じやすいと思われる。つまり、上述の例で下線部をカナ書きすれば “Gloria in excelsis [イネ] Deo”, “Pater omnípotens [テロ]”, “Et ab haedis [エタペー]” になると思われ、そのように発音しないとイタリア式発音

音が a, o, u か i, e かで決まる), gn は [ɲ], h については後述, æ は [e], ph は [f], qu は [kw], sc+母音字は [sk] または [ʃ] (後続母音が a, o, u か i, e かで決まる), th は [t], ti+母音字は [tsi], v は [v], xce については後述, y は [i]。イタリア語の読み方とは違う点がある。特徴的な違いは「ti+母音字」の発音で、イタリア語なら tieni 「動詞 tenere (保つ) の現在・2 人称単数形」は [tjɛ:ni], questione 「問題」は [kwɛstjo:ne] のように ti の部分は [tj] で言うのに対し (一部の地名に例外あり), イタリア式のラテン語発音では gratia を [gratsia], Pontio Pilato を [pontiopila:to] のように [tsi] で言う点。母音の e と o の発音の開閉にも違いがある (後述)。

とは言えないのではないかと思う¹⁸⁾。これは特に歌唱において大きな問題になると考えられる。

単語間の子母音結合はフランス語でも当然のことなので、諸解説書の大本と言えそうなフランス語版の“Liber Usualis”の発音解説でもわざわざ注意を喚起する必要を感じなかったのであろう。なお、ドイツ語では単語間で子母音が結合することはすくない。英語は中間的である。

もうひとつは「**単語間で同じ調音点・調音法を使う子音が続くときの二重子音化**」で、たとえば Credo の“et terræ”, “ad dexteram”, “descendit de (cælis)” は途中で言い直さず [エッテッレ] [アッデクステラム] [デシェンディッデ] と、日本語で言えば促音を入れる発音になるだろう。

ただ、上にあげた例は「に+高いところ」という前置詞+名詞（的な形容詞の用法）の結合、「父+全能の」という名詞+形容詞の結合、「そして+地の」「そして+ヤギたち+から」という並列の接続詞とそれに続く語や語群の結合など文法的な結びつきが強い単語連続で、その間に休止を置きにくい箇所であろう。では、結びつきが強い単語連続、たとえば “pax hominibus”（平和が+人々に）は [パクソ] のようにつなげるか、それとも [パクスオ] のように言うだろうか。イタリア語で語末に子音があるのは冠詞、前置詞、一部の形容詞だけということもあって（外来語をのぞきラテン語からの変化過程で消失）、これがラテン語発音でどうなるかは自明ではない。典礼やミサ曲等の演奏で実際にどう発音されているかは5節で報告する。

4.2 mihi と nihil の h の発音

ソレム修道院編の“Liber Usualis”の1920年フランス語版は、この2語について“autrefois écrits *mihi et nichil*”「古くは *mihi, nichil* と書かれた」という補足とともに *miki, nikil* と発音するよう指示している (p. xvij)。同書の1934年の最初の英語版では補足は“In ancient books these words are often written *nichil and michi*”「古い書物ではよく *mihi, nichil* と書かれていた」となっている (p. xxxvii, ほぼ最終版である1961年版も)。同修道院の1930年の聖歌録音でも [k] 音を使って歌われている¹⁹⁾。他の発音解説書類でも同様の補足をつけての説明がされているが、「古くは書かれた」「古い書物では」が [k] 音の正統性の根拠のように書かれているわけである。

しかしそこには問題がある。たしかに中世からルネサンス期にかけて *mihi, nichil* と書かれていたことがよくあった。しかし、その時代でも本来の形である *mihi, nihil* は使われていたし、*nihil* は1570年版以降の公式典礼書でも、ch どころか h もない *nil* の形でも書かれていることがある点にまず注意しなければならない（「レクイエム」の *Sequentia* に出てくる）。

この2語に ch の綴りを使うことに対してはルネサンス期の人文主義の時代に強い批判があったことが知られる²⁰⁾。そして16世紀にはこの書き方は廃れてゆく。トリエント公会議によ

18) 音声学者の A. Camilli (1909) は、語末の子音が母音で始まる語にポーズなしで続く場合は通常「強化」(=二重子音化) されると言う。それにしたがえば、それぞれ [インネ] [テッロ] [エッタッペー] となる。ただし、もし Camilli の言うとおりに “ad hoc” も同様のはずだが、2種類あるイタリア語の発音辞典 (<http://www.dizionario.rai.it> と <http://www.dipionline.it>) ではどちらも [adək] で、二重子音化させていない。

19) CD “Gregorian Chant Rediscovered” (Solesmes S.835, Creative Joys - Paraclete Press, 1995), Track 18, 21。

20) この問題に関する人文主義の時代の諸家の説が R. Sabbadini (1885, p.100f) に紹介されている。

る典礼改革を受けて出た 1570 年版やそれ以降の公式典礼書 “Missale Romanum” でも michi, nichil の形は使われていない²¹⁾。R. Sabbadini (1922, p.7) は, michi, nichil は中世の特殊な発音が「前」人文主義の時代に引き継がれたものだが、氏の著作当時の (イタリアの) 学校でもまだなくなっていない (non ancora scomparsa) と言う。しかし、それは言い換えれば、[k] 音を使うのは 20 世紀初期のイタリアの主流の発音ではなかったということであろう²²⁾。

h はすでに古典期においても無音化傾向が強かったようで (たとえば S. Allen 1978, p.43f), 中世には基本的に無音だったと思われる。そうした状況下で、複合語以外で語中で母音字には含まれた h の字を持つ少数の語のうち (典礼文では多くないが) 頻用語である mihi, nihil については、h が無音だと語内に母音連続が生じ、さらには 1 音節に発音されてしまいやすい。これは音節数を重視する詩の読みにおいて特に大きな問題になるので、それを避けるために発音上または単なる文字上の工夫をしたであろうということは考えやすいところである。

そして、もし ch の綴りを使うのが発音上の工夫だったとしても、それが無声の破裂音 [k] をあらわそうとしたものとはかぎらない。むしろ [k] の突然の登場は異様である。[h] かそれに近い音をあらわそうと何とか工夫したのが (同綴異音が生じてしまうが) ch の綴りだったという方が考えやすい。Allen (1978, p.45) は、後期ギリシア語の発音として当時なじみのあった [ç] 音 (同書では「ドイツ語の ich の子音」と表現: [ヒ] の子音) だろうとしている。一方、イタリアでラテン語研究入門書として有名な Traina et al. (1998, p.56f) は ch の使用を純粋に文字上の工夫と考え、michi, nichil は過剰修正で、正しい発音は確実にどの時代も mī, nīl だったとまで言っている。

4.3 exce の発音

“Liber Usualis” は 1920 年のフランス語版でも 1934 年の英語版でも “in excelsis” ([天の] 高いところに) の excelsis を [ekʃelsis] [エクシエルシス] と読ませる。他の多くの発音解説書も同様である。しかし、イタリア人のどれほどがわざわざそんな読み方をするだろうか²³⁾。この綴り

21) <https://archive.org/details/messale-tridentino-di-san-pio-v-1570>。このトリエント公会議以前のたとえば 1474 年版では michi, nichil (<https://archive.org/details/missaleromanumm01churgoog>)。

22) Camilli (1909) は mihi, nihil は [k] 音としているから、それが正しいと考える研究者が 20 世紀初頭にいたのも確かである。

23) イタリア語の発音辞典にいくつかのラテン語についてイタリア語としての発音が記されているが (URL は注 18 参照), exce を含む語は基本 [エクスチェ...] であり [エクシエ...] はない (Excelsior, excerptum など)。

三ヶ尻正氏 (2011, p.112f) は excelsis のイタリア式発音に [エクスチエルシス] [エクシエルシス] [エクセルシス] の 3 通りがあるとした上で、Scherr (2010) が [エクスチエルシス] がベストと言っているとしながら「日本人が歌うなら (中略) [エクシエルシス] が分かりやすいのではないのでしょうか」と言い、実際のイタリア人もそれが多いようだとしている。しかし、実際のイタリア人についての説明は事実ではない (後述)、どれも同様に良いならともかく、発音者にとってのわかりやすさという基準で外国語の発音を決めるのはおかしい。むしろ、わかりやすさなら [エクスチエルシス] が一番である。なお、三ヶ尻氏の著書は日本語による解説としてもっとも情報が豊富だが、「純イタリア式」なる発音については事実誤認がある。それはむしろ「無教養イタリア読み」とでも言うべきものである。同氏は eleison を [エレイゾン], gli を「[ㄱィ] (舌の側面の摩擦音)」とするのがそれだとしているが (p.111), eleison はそう言う司祭もたしかに在るが、

の中世発音についての情報は私は持たないが、語源から言えば使用頻度の高い接頭辞の *ex-* が *celsis* についたものなので、きちんと言えば [eksʃɛlsis] [エクスチェルスィス] となるはずである。

ただ、それだと *xc* の部分で「破裂+摩擦」という調音動作を2回繰り返すことになり、すこし発音しにくいということはあるだろう。ソレム式の [ekʃɛlsis] [エクシェルスィス] はそれを1回に省略してしまった言いそこない発音なのかもしれない。あるいは、イタリア中部の地域性としてイタリア語の [ɟ] を [j] とする傾向があるので (*pace* [パーチェ] を [パーシェ] など)、ソレム修道院が頼りにしたイタリア人助言者がそれをここにあてはめて [eksʃɛlsis] と言い、それが [ekʃɛlsis] と聞かれた、あるいは子音連続を回避するために [s] を省略して [ekʃɛlsis] と言おうとしたものが結果的に [ekʃɛlsis] になったというような可能性も考えられる。

ほとんどの解説書類がソレム式を示す中で、1890年生まれイタリア中部出身で、ローマで典礼音楽を学んだ聖職者・音楽家 C. Rossini による聖歌集 (1933, p.iii) では *excelsis* の発音を “*eks-chél-sis* (not *ek-shél-sis*!)”、つまり [エクスチェルスィス] だと強調している点が注目される²⁴⁾。[エクシェルスィス] はおかしいと言っているわけである。1904年の「グレゴリオ聖歌会議」でのバチカンのレッラ神父指揮による Roman Schola の聖歌録音では、音質はよくないが [ekʃɛlsis] または [etʃɛlsis] [エクチェ〜エツチェ...] に聞こえる²⁵⁾。先述のピウス10世が勧める「ローマで使われている発音」ならどうやら [エクシェルスィス] ではなさそうだ。なまだったような [ekʃɛ] [エクシェ...] をソレムがなぜわざわざ規範としたのか、理由は現時点ではわからない。

4.4 単語の内部で母音にはさまれた *s* と *x* の発音

s については、*Iesus* (イエス) や *miserere* (あわれみたまえ) を [je:sus] [イエースス], [misere:re] [ミセレーレ], つまり無声音の [s] で言うか、あるいは [je:zus] [イエーズス], [mizere:re] [ミゼレーレ], つまり有声音の [z] で言うかの問題である。これについての解説書類の説明は、[s] 説, [z] 説, そしてその中間という3説に分かれる。この不統一のもともとの原因は、“*Liber Usualis*” の解説が感覚的な書き方になっていて、わかりにくいからではないかと思う。

ふつうは [エレイソン] だし、*negligere*, *anaglifo*, *glicerina*, *glissando* のようなラテン語、ギリシア語由来の *gli* を持つ語ではイタリア語でも [gli] であり [ʎi] と言わない。特に語頭の *gli* は代名詞と少数の固有名詞以外すべて [gli] だし、そもそも [ʎ] は摩擦音ではない。イタリア式として非標準的な現象については5.2.6節で述べる。

三ヶ尻氏が引く Scherr の著書は声楽家や指導者等へのインタビューや実態観察にもとづくものだが、2010年版 p.88 では *exce/exci* に4種類の発音があるとし、その中で [ksʃ], つまり *excelsis* なら [エクスチェルスィス] という発音について、“*Diese gilt als korrekteste und erstrebenswert für gute Lautung.*” 「これがいちばん正しいとされ、良い発音をするためにがんばって使う価値がある」とする。そして、[kʃ] つまり [エクチェルスィス] は “*etwas einfacher und akzeptabel*” 「先のものより簡単で容認される」としている。しかし三ヶ尻氏が推す [kʃ] つまり [エクシェルスィス] は「英米の手引き書ではこれが正しいとよく書かれているが推奨できず、イタリア人はそれを不注意な発音か、良くて方言的と思うだけ」(原文省略)としている。[tʃ] [エツチェルスィス] は「強くイタリア語化した形で、無頓着で無教養なものなので芸術的歌唱においては避けられる」としている。

24) 経歴は以下のWEBページによる。https://www.cpd.org/wiki/index.php?title=Carlo_Rossini&oldid=1040284

25) 注12に記したWEBページにある Direction Mgr Antonio Rella の音源 03, 09。

その 1934 年の英語版では母音間では「わずかにやわらげる (slightly softened)」とあるだけだが、1920 年のフランス語版では、「母音間ではごく軽くやわらげるが (très légèrement s'adoucit), z の音までにはけっしてならない」とある。この z はラテン語の字を指していると考えるのが妥当だと思うが、z の項を見ると Zizania の語例つきで「ds と発音する」とある。語頭に立つ子音として [ds] は自然ではないので、おそらく文字 z は破擦音 [dʒ] になることを言いたいのだろう。すると s の項で母音間では z にしないというのは、破擦音にしないということと言いたいのではないかと思う。したがって、z にしないでごく軽くやわらげるという説明は、破擦音にせず有声化させること、つまり母音間の s は [z]（[イエーズス] [ミゼレーレ]）と発音すると言いたいのだろうと私は理解する。実際、1904 年にソレム修道院のモクロ師が弟子たちを指揮した聖歌録音でも *resurrexit, posuisti* の s は [z] に聞こえるし²⁶⁾、同じ場でのバチカンのレッラ神父指揮による Roman Schola の録音も母音間の s は [z] に聞こえる²⁷⁾。言語学者の Traina (1973, p.64) も母音間の s は有声だとしている。しかし音声学者の Camilli (1909) はイタリア語と同じとしているので、単語による使い分けがあると言っているのだろう。

音声の専門的知識をもたず実際の発音もよく知らない人が“Liber Usualis”などのあいまいな説明を見たとき、母音間の s は [z] でないと思っても不思議はなく、[s] と [z] の中間だと思ってもしかたがない。[s][z] の中間だという考え方が典型的に書かれているのが、日本の『すぐに役立つ合唱ハンドブック』における金澤正剛氏の解説で (p. 123), 単語内の母音間の s について「無声のするどい摩擦音 [s] でもなく、また有声の [z] でもなく、[s] がその前後の母音の影響を受けて同化作用をおこし、わずかながら有声化して [z] に近くなった音」とある。しかし、この「わずかながら有声化して [z] に近くなった音」はどのようにすれば発音できるのだろうか。

ローマ近辺のイタリア語で、母音間の s が無声にも有声にも聞こえる音になりうることは私も調査の場で経験したことがあるが²⁸⁾、ほとんどの場合はどちらかはっきりしている。

そもそも、有声化させるには基本的には声帯を振動させる必要がある。声帯は振動するかしないかのどちらかで、その中間はない。声帯を振動させながら「わずかながら有声化」させるとすれば、声帯の振動の大きさを抑えるように呼気を調節するか声門を開きぎみにするか、[s] の摩擦の途中から振動を始めるかということになるだろうか（歌なので特定の高さの音を出さないといけないから、s の部分だけ声帯の振動回数—声の高さに比例する—を少なくすることはできない）。無意識でそうになってしまう一部のイタリア語母語話者は別として、歌唱の中でそういうことを意識的にできる人がいったいどれほどいるだろうか。金澤氏のものは、どうすればできるのかわからない発音を指示するという、困った解説になっている。同氏は「現在ローマ教皇庁の公認している読み方を採用した」としながらも典拠は示していないので何を指すのかわからないが、私

26) 注 25 と同じ WEB ページにある Direction Dom Mocquereau の音源 07 (Resurrexi)。

27) 同ページの Direction Mgr Antonio Rella 03, 07 等。

28) この背景には、一般にイタリア語では s が無声か有声かの使い分けはあるものの、その違いは少数の例外をのぞけば意味の違いには結びつかないので、はっきりどちらかにしなくても困らないという事情がある。

見では氏の記述も結局は“Liber Usualis”のあいまいな記述に由来する誤解であろう。

x については、母音間での発音の説明は s 以上の混乱状態にある。crucifixus や resurrexit などの x をどう言うかの問題だが、これには無声の [ks] 説、有声の [gz] 説、その中間説、そして前半だけ有声という [gs] 説がある。“Liber Usualis”の 1920 年フランス語版には説明はなく、1934 年英語版には母音間では「わずかにやわらげる (slightly softened)」とのみ書かれている。

4.5 母音字 e と o の発音（広い狭いか）

母音字 e と o は、口の上下の開き方が相対的に広い発音 [ɛ][ɔ] と相対的に狭い発音 [e][o] の使い分けがイタリア語にもフランス語にもドイツ語にもある。古典期のラテン語では短い e, o は相対的に広く、長い母音は相対的に狭かったという有力な説がある。広狭の使い分けは英語にも日本語にもないので、現代の外国語を学ぶときも日本では詳しい説明はなされないか、説明されても使い分けできるようにするための訓練はしっかりなされないのがふつうであろう。

教会ラテン語の e o にも広狭の使い分けはあるだろうか。“Liber Usualis”の説明はやはりあいまいである。1920 年のフランス語版では「(フランス語の) nef, mets, mot のように中程度に口を開いた (médiocrement ouvert)」音としている。しかし例にあがっている語の発音は辞書的には [nɛ] [mɛ] (以上は広), [mo] (狭) なので、「中程度に口を開いた」の真意はわからない。英語版では e について red, men, met の例, o について for の例をあげて、そのように発音されると言っている。しかし、先述のように英語では e, o に広狭の区別はなくいずれも広いので、説明の真意として、狭い方ではなく広い方だと言っていると単純に理解することはできない。

以上のような事情のためか、他の解説書類での説明もばらばらである。しかし、古典学者の G. B. Pighi (1934, p.227, 231) は Roma, cena, stella などの例をあげて、イタリア語と違ってイタリア式のラテン語では e, o は常に広い音で言うとしている。イタリア語の発音辞典のひとつ DOP にも「アクセントがあれば」というただし書きつきで同様の説明がある²⁹⁾。音声学者 Camilli (1909) の説明もそこまでは同じだが、アクセントがない場合は「イタリア語のように」としている。その場合は広くないと言っているのだろう。なお、現実の広狭の度合の多様性を踏まえ本稿ではこれを 7 段階に分けて分析をおこなうが、音声記号での書き分けは煩瑣になるので、以下あえてすべてを [e] [o] で統一する。

4.6 その他

イタリア語では有声子音の前にある s は有声になる (sb, sd, sg, sl, sm, sn, sr, sv)。この「**逆行同化による有声化**」の規則をラテン語にもあてはめると baptisma は [baptizma] [バプティズマ] となるだろう。さらにこれを、単語の間にあてはめると、たとえば “Agnus Dei” は [apuzdei] [アニュズデイ] のように言っておかしくないことになる³⁰⁾。

29) <http://www.dizionario.rai.it/static.aspx?treeID=100&pg=2>

30) 実際、イタリア語の辞書にはこのラテン語表現の発音として [z] を示すものと [s] を示すものがある。また、Camilli (1909) はラテン語の (Gallia est) omnis divisa... のイタリア式読みとして [ɔmniz divi:sa] を示している。

5. 実態調査

上記の問題点について、以下の3つのカテゴリーの録音資料を聞いて実態を検討した。網羅的な資料収集とは言えないが、市販音源のほか WEB 上で複数の検索語を使って検索し、候補として出てきたものをチェックした。音源一覧を稿末に示す。

5.1 資料

資料 A (聖歌) イタリアの聖歌隊 9 と個人 1 の歌唱による聖歌 Gloria と Credo (1904-2012 年録音) (**資料 A1**) , および 21 司祭による歌唱ミサ (1999-2021 年録音) (**資料 A2**) 。資料 A2 は録音音質が特によくないものが多いため、開祭の儀の Gloria の冒頭のみを分析対象とする。

資料 B (芸術的歌唱) ロマン派の時代のミサ曲でイタリア人による演奏が多いものとして、ベルディ作曲『レクイエム』の中の“Ingemisco”における 1910 年頃以降録音のイタリア人歌手 (テノール) 52 名による歌唱 (**資料 B1**) , およびプッチーニ作曲『グロリア・ミサ』の 8 団体による 2008 年以降の 10 演奏におけるイタリア人歌手 (テノール・バス) 14 名の歌唱 (**資料 B2**) 。

資料 C イタリア出身のローマ教皇 6 名と、教皇決定を宣言する枢機卿 4 名の声。内容の共通性を高めるため、教皇については“Urbi et Orbi”の祝福を中心にした。1903-1978 年の録音。

5.2 結果

5.2.1 単語間の音結合

子母音結合 : ごくわずかな例外をのぞき、ひとつのフレーズ (途中に句読点や楽譜上の休符、音楽上の切れ目がないもの) の内部では子母音結合が生じている。たとえば“Gloria in__excelsis Deo. Et__in terra pax__hominibus...”の__部分はつないで言うので、カナ書きすれば [グローリア イネクチェルスシス デーオ エティンテッラ パク ソミニブス] 。“Pater__omnipotens”は [パーテ ロムニポテンス] , “Et__ab__haedis”は [エタバーディス] のように言う。これはどの資料でも同じであり、イタリア式発音であるための必須条件と言えよう。

ただし、Credo の“factusest”や“sepultusest”のように受動相・完了形を作る「**完了分詞+est**」の間では、結合させず言い直す例がやや目立つ (資料 A1 で全 30 発音のうち 5 例、資料 B2 で全 30 発音のうち 2 例、他資料には該当箇所なし) 。

Camilli (1909) が言うような子母音結合における子音の二重化 (注 18 参照) は語末が s の場合は頻繁に生じるが、それ以外では多くない。この**語末が s の場合の二重子音化**とは、“gratias__agimus tibi”, “solus__Altissimus”を単に gratia-sagimus [グラツィア サジムス] や solu-saltissimus [ソル サルティッシムス] とつなぐのではなく、[s]を長くして (日本語で言えば促音を入れて) gratias-sagimus [グラツィアッサジムス] , solus-saltissimus [ソルッサルティッシムス] のように言うことである。資料 A1 では全 40 発音中に子音が二重化していると聞いた例 34 に対し単子音のままと聞いた例が 4、資料 B2 では 30 発音中 22 対 0、資料 C は 12 発音中 6 対 5 (他は切っている例と不明瞭なため判断保留例 : 資料 B1 には該当箇所なし) 。

それ以外での子母音結合における語末子音の二重化例は資料 A1 にはないが、資料 B1 で 3 箇所“Etab haedis”のうち最後(495 小節)で 1.4 秒前後の長めの音符が et にあてられている箇所では、二重子音化(促音挿入)した [et:a] [エッタ] に聞こえる例が全 52 発音中 36 と多い。しかし長さが 1 秒以下の他の 2 箇所では全 104 発音中 36 と減る。“Et ab haedis”は [ab:e] [(タ)ッベ] に聞こえる例が全 156 発音中 12 だが、音符が 0.2 秒程度と短い 482 小節では 52 発音のうち 2。このように語末子音の二重化例は非常にゆっくり発音するときに多く、速めだとすくない。音による違いもあり、“Interoves”では r が複数回弾かれることはまれで、全 104 発音中 7。以上に世代差・地域差はなさそうである(資料 B2 では合唱・オーケストラと重なっていて判断困難のため除外)。資料 C では 3 名の“etauctoritate”のうち 2 名が二重化した [et:a] [エッタ] だった。

実は資料 B1 で語末に子音がない“ne perenni” (ne は 1 秒程度)で、後続の子音が二重化して [nep:e] [ネッペ] に聞こえる例が全 52 発音中 14 ある。そのことや先述の発音速度との関係も考え合わせると、子母音結合における二重子音化は、語末が s の場合以外は、ていねいに言う場合のひとつの発音法と考えることができるのではないかと思う。

単語間で同じ調音点・調音法を使う子音が続くときの二重子音化:これも頻繁に生じている。資料 A1 の“etterrae”, “resurrexittertia”, “addexteram”, “descenditde”で計 40 発音中 37 が二重子音 [t:] に聞こえる。つまり [エッテッレ] [レズッレクスイッテルツィア] [アッデクステラム] [デンエンディッデ] のように、日本語で言えば促音化する。

ただし、**有声子音に無声子音がつづく場合**は二重子音化は頻繁ではない。“sedtu”で d に t がつづく場合は資料 B1 の 52 発音中 28 だけが [t:] [セットゥ], “subPontio”で b に p がつづく場合は資料 A1 と B2 の合計 15 発音中 1 だけが明瞭な二重子音の [p:] [スッポンツィオ] (ただし A1 に判断保留 6)。“sedtu”は**支え母音**(主に[a])を挿入して言い直す例も 5 あった([セツダトゥ])。資料 C では教皇 1 名が調音点・調音法に関係なく単語間の子音連続に常に母音を挿入。

5.2.2 mihi の h の発音

資料 A1 は 5 団体・個人を集めたのみで、うち 2 が [miki] [ミキ] (1965 年と 2018 年のもの), 2 が有声の h 音を入れた [mifi] [ミヒ], 1 が [mi:] [ミー] に聞こえる。資料 B1 では圧倒的に多いのは [mi:] [ミー] または [mifi] [ミヒ] だった。曲中の 2 回の繰り返しで両方が聞かれることも少なくない。全 52 名の約 8 割にあたる 42 名がそのような発音で、残り 9 が [miki], 1 は [mibi] に聞こえた。[miki] [ミキ] の使用者 9 名は 1873~1940 年の生まれである。しかもその世代は全 21 名なので、その約半数にすぎない。[miki] は古風という Scherr (2010, p.87) の説を裏づける。他の資料には該当語なし。nihil については録音がすくなく、分析対象から除外した。

5.2.3 exce の発音

資料 A1 と A2 で Gloria 冒頭の先唱者(独唱)による excelsis を分析対象とした。結果として、exce 部分は資料 A1 の 10 団体・個人のうち 5 が [ekʃe] [エクチェ] で、あとは [eksʃe] [エクスチェ], [etʃe] [エッチェ], [ekʃe] [エクシェ], [egʃe] [エグシェ] と判断保留が 1 ずつだった。

これは各団体・個人に複数の録音がある場合はその主流をとった数値だが、主流以外の発音として [egsʃe] [エグスチェ], [ef:e] [エッシェ], [ekse] [エクセ], [ese] [エセ] と聞こえるものもあった。このように、おどろくほどの多様性がある。資料 A2 の 21 のミサは音質がよくないのであいまいさを含む判断になるが, [eksʃe] 1, [ekʃe] 4, [ekʃe~etʃe] 5, [etʃe~ef:e] 5, [ef:e~ef:e] 3, [ekʃe~ekʃe] 1, [ef:e~ef:e] 1, [ekʃe] 1 と聞いた。[ekʃe] [エクシェ] にしか聞こえない例は 1 だけだが, この司祭には別録音があり, そこでは [ekʃe] [エクチェ] と言っている³¹⁾。このことは [ekʃe] [エクシェ] が [ekʃe] [エクチェ] の崩れた発音であることを示唆する。

資料全体として多いのは [ekʃe] [エクチェ] で, [etʃe~ef:e] [エ(ッ)チェ] がそれにつぐ。諸解説書が言う [ekʃe] [エクシェ] はほとんどない。文字どおりに読む [eksʃe] [エクスチェ] 以外はすべてがその簡素化または崩れた発音と考えて矛盾は生じないだろう。

5.2.4 単語の内部で母音には含まれた s と x の発音

どの資料でも母音間の s はほぼすべて有声の [z] になっている。例外は資料 C でローマとその近郊出身の教皇ピウス 12 世とカナリー, フェリーチの 2 枢機卿。ただし, ローマ出身でもレオ 13 世は有声に聞こえる。オッタ비아ニ枢機卿は標準イタリア語式に単語によって使い分けているようだ。このように一定の地域性はあるが³²⁾, 全般には [z] である。ただし, *resurrexit*, *resurrectionem* は s の前が接頭辞 re- になっていて語構成上の切れ目がある単語だが, この場合は資料 A1 の合計で [s] 5, [z] 12, 判断保留 3 と, 無声の [s] が少数派だが出てくる。なお, 資料一覧に音源は示していないが, ギリシャ語である “Kyrie eleison” はほぼすべて無声の [s]。

母音間の x については, 資料 A1 の *crucifixus* と *resurrexit* は 10 団体・個人のうち, 音声不明瞭のため判断を保留した后者の 2 例以外, すべて無声の [ks] である。資料 B2 も同様。これに対し資料 B1 の *exaudisti* は, 52 名のうち無声に聞こえたもの 25, 有声の [gz] に聞こえたもの 24, 判断保留 3 で, 世代差や地域差はなさそうである。この結果は, *exaudisti* は同じ意味のイタリア語の *esaudisti* (s は有声) を想起させるために有声に引かれやすい例外で, 基本は無声だと理解すればよいだろう。なお, *crucifixus* のイタリア語 *crocifisso* は無声, *resurrexit* は対応語なし。Scherr (2010, p.87) もイタリア語の対応語が有声の s ならラテン語の x も有声と言う。

5.2.5 母音字 e と o の広狭

感覚的な判断にならざるをえないが, 中音域で発音されるいくつかの母音について開口度を -3 (極狭) から +3 (極広) までの 7 段階 (中が 0) で判定した。結果として, どの資料でも全般に広い傾向が強く, 明らかに狭く聞こえる発音はほとんどないことがわかった。古い世代には「極広」の発音が多いが, 現役世代では減っている。そして, 語末で **アクセント** がない場合は広さが抑えられることが多く, また, 芸術的歌唱では **単語や歌詞の内容** による違いも見られる。

31) 稿末の音源一覧に示したミサの最後の 2 つ。

32) イタリア語の地域性として母音間の s は北部では語によらず有声, ローマや南部は無声になる傾向が強い。

具体的には、芸術的歌唱で新旧にわたる発音者数が多い資料 B1 についてまず見ると、全般に広いが、アクセント母音 (平均+1.9) に比べて語末の非アクセント母音 (平均+1.3) はすこし広さが減少する³³⁾。単語 (の意味) による違いもあり、Deus (神) の e は非常に広いことが多い (平均+2.7)。また、古い世代の方が「極広」の母音の使用が多く、逆に「中」がすくない³⁴⁾。そして、さまざまな内容の歌詞を含む資料 B2 では歌詞の内容による違いが見られ、受難を描く Crucifixus の部分ではバス歌手の開口度の平均は+0.9 と「やや広」前後のものがほとんどだが、バス歌手でも祝福の Benedictus では平均+2.3 と、もっと広いものを多く使う。

資料 A1 の Gloria 冒頭の独唱“Gloria in excelsis Deo.”でも、アクセントのある o にくらべてアクセントのない o は狭い (平均+1.4 対 -0.9)。独唱者の生年はわからないが、1936 年以前の録音のものはアクセントに関係なく広めである。資料 A2 は現代の録音であるためだろうが全般にあまり広くないが、アクセントのある o にくらべてアクセントのない o はやはり狭めになっている (+0.7 対 -0.6)³⁵⁾。資料 C は話者の世代が古いためだろうが全般にかなり広く、狭いものはすくない。アクセントによる使い分け傾向もやはりある。個人差もあり、「極広」はヨアンネス 23 世、ヨアンネス・パウルス 1 世、ドミノーニ枢機卿に目立つ。

5.2.6 その他 (非主流、ぞんざい、状況による、地域性があるなど、標準的と言いがたい発音)

・**単語間の逆行同化による s の有声化**：全体として有声化は少数派。資料 A1 で“excelsis Deo”, “Agnus Dei”, “Tu solus Dominus”, “cuius regni”の計 40 発音のうち s が [z] に聞こえる例が 12 (アニユス等), [s] が 21 (アニユス等), 判断保留 7 だった。資料 A2 の“excelsis Deo”は [z] が 6 (...スイズ), [s] が 11 (...スイス), 判断保留 4 と、資料 A1 と同程度の割合である。資料 B1 では途中に音楽上のフレーズの切れ目を感じにくい場合の“vultus meus”, “preces meae”, “ab hoedis me”では、計 156 発音のうち [z] が 27 (ヴルトゥズ等), [s] が 120 (ヴルトゥス等), [ə] の挿入が 1, 判断保留 8 で、世代差・地域差はなさそうである。資料 B2 の“Agnus Dei”では 12 名のうち [z] 3, [s] 9。資料 C でも“omnipotens Deus”や“Ioannis Baptistæ”などの s を [z] にする教皇がいる。

・**単語間の逆行同化による調音点変化**：音質がよくないことは考慮しないといけませんが、資料 A1 で“unum deum”, “Spiritus Sanctum”などの m が [n] に聞こえる例が 40 発音中 22 あった。

・**子音連続の回避傾向**：単語間もふくめて子音が 3 つ連続する場合、ひとつが弱い、なくなる傾向がある。資料 A1 については音質がよくないだけでなく合唱部分のためわかりにくいことを考慮しないといけませんが、Sanctus は [k] を抜いた [santus] [サントゥス] に聞こえる例が 50

33) 開口度を便宜的に間隔尺度と見て計算した平均値だが、両者間の符号検定の結果、差は統計的有意 ($p<.01$)。

34) mihi に [k] を使う 1940 年までの生まれとそれ以降の生まれで分けると、8 語に対する開口度の使用数の分布は、広い方から順に上の世代 (21 名) が 50, 85, 20, 13, 0, 0, 0, 下の世代 (31 名) が 39, 115, 47, 45, 2, 0, 0 だった。開口度が 0 (中) より広いものについて残差分析をおこなうと、世代間で統計的有意差があるのは開口度が「極広」と「中」のものの使用率で ($p<.01$)、上の世代の方が「極広」が多く、「中」がすくない。

35) 資料 A1, A2 とも符号検定で統計的有意 ($p<.01$)。

発音中 16 ある。“Rex cælestis” については [reksʃe] [レクスチェ], [rektʃe] [レクチェ], [rettʃe] [レツチェ] に聞こえる例がそれぞれ 4, 5, 1 例だった。expecto, expatre, estcum, estper も [k] や [t] を抜いた [espekto] [エスペクト], [espa:tre] [エスパートレ], [eskum] [エスクム], [esper] [エスペル] に聞こがちである。資料 B1 は独唱であるためかなり明瞭だが, dextra は 52 名中 31 名が [dekstra] [デクストラ] で, 21 名が [destra] [デストラ] (イタリア語と同形) である。ただ, [destra] の 21 名のうち 14 名が 1940 年までの生まれであり (使用者はその世代の 64%, それ以降の世代では 23%), 古い発音と言えそうである。先述の excelsis の [eksʃe] [エクスチェ] 以外の発音 ([ekʃe] [エクシェ] を含む) もこうした子音連続を避ける傾向から生じるのだろう。以上の傾向は資料 C の教皇・枢機卿音声にもあるが, むしろ 2 子音の連続であっても間に支え母音を挿入して “ad vitam” を [adəvi:tam] のようにする発音が目立つ。語末でも m や n に支え母音をつけて Eminentissimum [eminentissimumə] [エミネンティッスィムマ] などと言いがちである。支え母音の挿入も, ていねいに言おうとするときのひとつの方法ではないかと思われる。

2 子音の連続でもイタリア語にない組み合わせは, ひとつを省略するか二重子音させる現象もときに見られる。たとえば, 資料 A1 の “et vitam” [evitam] [エヴィタム], “et conglorificatur” [ek:o...] [エッコ...] 。

・**子音の長さ**：資料 C でローマ出身の教皇に顕著だが, gratia を [grattsia] [グラツツィア] と [tʃ] の閉鎖が長く, descendat も [deʃ:endat] [デッシェンダト] と [ʃ] の摩擦が長いことがある。これはイタリア語の地域性の反映である (郡 2006)。資料 A1, B1 ではわかりにくい, B2 の “Agnus Dei” では [n] の長い [aɲ:us]~[aɲ:uz] [アンニユス(ズ)] が 12 名のうち 4 名いる (出身地不明)。

・**その他**：単語内での逆行同化による有声化は多く, 資料 A1 の baptisma で [z] を使った [バプティズマ] が 10 発音のうち 8 ある。これに対し, 無声化はすくない。資料 B1 の 52 名のうち absolvisti の下線部が文字どおりの [bs] [アブソ...] と聞こえるものが 41, 逆行同化で無声化した [ps] [アプソ...] と聞こえるものが 4, 順行同化した [bz] [アブゾ...] が 3, 判断保留 4。

6 まとめ

カトリック教会で使われるラテン語の標準発音は, 20 世紀初頭に教皇ピウス 10 世が「ローマで使われているもの」として典礼用に推奨したイタリア式の発音である。教皇はその具体的な内容を示さなかったが, ローマの教皇庁を中心にイタリア各地で多少の変種を包括しつつおこなわれていた発音を指すと考えるのが妥当と思われる。

イタリア式発音を主に音楽関係者向けに解説した英語や日本語の書籍類の説明は, 19 世紀末からグレゴリオ聖歌の校訂をおこなって有名になったフランスのソレム修道院の発音解説を, 多少のアレンジを加えつつ直接間接に引き継いだもののようである。しかし, ソレム修道院の解説にはイタリア式の実態とは異なる部分があり, イタリア風ではあっても厳密には「ソレム修道院式」と呼ぶべきものである。しかし, イタリア国外ではそれがそのまま権威あるイタリア式の解説と受け取られ, 解説書も実際の発音をよく観察しないで書いたのではないだろうか。

20 世紀初頭から現在までのイタリア人によるラテン語の歌唱や発音を記録した資料を検討すると、母音 e と o で口の開きがきわめて広い発音が減ったことや、20 世紀初頭でも主流ではなかったが歌唱で一変種として使われていた作為的な mihi の [k] 音をほとんどやめたなどの変化も観察されるが、全体として発音は昔も今もほぼ同じである。

そして、解説書のほとんどに共通する excelsis と mihi についての説明（[エクセルシイス] [ミキ]）は実際の発音の大勢（[エクテルシイス] [ミー〜ミヒ]）とは異なっている。また、そうした解説書には単語間の音結合の規則がまったく説明されていない。そのため、日本語やドイツ語を母語とする読者は、たとえば“Gloria in excelsis Deo. Et in terra pax hominibus...”なら [グローリア イン エクセルシイス デーオ エト イン テッラ パクス オミニブス] のように単語の発音をそのまま並べればよいと思ってしまうが、それはイタリア式ではない。イタリア式なら [グローリア イネクテルシイス デーオ エティンテッラ パク ソミニブス] のようになる。

また、母音 e と o は口の開きが広いものが全般に多いが、上述の世代差のほか、語末でアクセントがない場合の広さの抑制と、芸術的歌唱では単語や歌詞の内容による違いが見られた。

このほか、baptisma はふつう [バプティズマ] と言うような「逆行同化による音変化」があるが、単語間にまでそれを適用して“Agnus Dei”を [アニユズデイ] とする発音は少数派で、標準的と考える必要はなさそうだ。また、Sanctus を [サントゥス] のように [k] を抜く「子音連続の回避」もあるが、現代では一般的なものではないようだ。

文献・音源

研究書・論文等

- Allen, W. Sidney (1978) *Vox Latina: A Guide to the Pronunciation of Classical Latin*. Cambridge University Press.
- Brittain, Fred (1934) *Latin in Church: Episodes in the History of its Pronunciation Particularly in England*. Cambridge: University Press. (第2版 1955 年)
- Camilli, Amerindo (1909) â.ke:t (sùit) la pronuntfja delle lingwe 'klassike in ita:lja. *Le Maître Phonétique*, 24, 125-126.
- Dubois, Louis (1922) *Le Plain-chant grégorien et la Prononciation romaine du latin*. Paris.
http://archive.ccwatershed.org/media/pdfs/13/07/11/19-20-22_0.pdf
- Eichenseer, Caelestis (1963) De pronuntiatu latino. *Palaestra Latina*, 181, 1-9.
- Erasmus, Desiderius (1528) *De Recta Latini Graecique Sermonis Pronuntiatione*. Basel (等)
- Green, Janet M. (2000) Queen Elizabeth I's Latin Reply to the Polish Ambassador. *The Sixteenth Century Journal*, 31(4), 987-1008. <https://www.jstor.org/stable/2671184>
- Marouzeau, Jules (1943) *La Prononciation Du Latin (Histoire Théorie, Pratique)*(3 ed). Paris: Société D'édition « Les Belles Lettres »
- Mocquereau, André (1927) *Le Nombre Musical Grégorien ou Rythmique Grégorienne*. Tome II. Paris: Desclée.
- Pighi, Giovanni Battista (1934) La Pronunzia del Latino. *Aevum*, 8 (1), 215-233. 227, 231
- Sabbadini, Remigio (1885) *Storia del Ciceronianismo e di Altre Questioni Letterarie nell'Età della Rinascenza*. Torino: Loescher.
- Sabbadini, Remigio (1922) *Il Metodo degli Umanisti*. Firenze: Le Monnier.
- Scherr, Vera U. G. (2010) *Handbuch der lateinischen Aussprache* (2 ed). Kassel: Bärenreiter.
- Traina, Alfonso (1973) *L'alfabeto e la Pronunzia del Latino* (4 ed). Bologna: Pàtron.
- Traina, Alfonso e Perini, Giorgio Bernardi (1998) *Propedeutica al Latino Universitario* (6 ed). Bologna: Pàtron.
- 郡史郎(2006)「イタリア語の子音の長さとその地域差：母音間の[p][ɸ][tʃ]を中心に」『Aula Nuova』（大阪外国語大学）5, 55-93.（本文 <http://corismus.com/it/studi/conslung.pdf>）

教会式発音の解説 (出版社情報省略)

Copeman, H. (1996) in McGee, T.J. *Singing Early Music*. De Angelis, M. (1937) *The correct pronunciation of Latin according to Roman usage*. Goodchild, M.A. (1944) *Gregorian Chants for Church and School*. Green, A. et al. (1946 [1957]) *Complete Proper of The Mass*. Hines, R. S. (1975) *Singer's manual of Latin diction and phonetics*. May, W.V. et al. (1987) *Pronunciation Guide for Choral Literature*. Rossini, C. (1933) 'Proper' of the Mass for the entire Ecclesiastical Year. (www.gregorianbooks.com/gregorian/pdf/CMAA/1933_Rossini_Proper.pdf) Silva, S. (2020) *Latin Pronunciations for Singers*. Suñol, G. (1930) *Text Book of Gregorian Chant According to the Solesmes Method*. Liber Usualis 1920 年フランス語版 *Paroissien Romain*. (http://archive.ccwatershed.org/media/pdfs/13/07/17/15-06-29_0.pdf), 英語版 *The Liber Usualis*. (1934 年版 http://archive.ccwatershed.org/media/pdfs/12/07/06/17-07-32_0.pdf, 1961 年版 <https://media.musicasacra.com/pdf/liberusualis.pdf>) 江澤増雄(2002)『教会ラテン語への招き』小泉功(1959)『宗教音楽におけるラテン語の読み方』聖歌集改訂委員会(編)(1966)『カトリック聖歌集』高橋正平(1994)『レクイエム・ハンドブック』日本合唱指揮者協会(編)(2013)『すぐに役立つ合唱ハンドブック』三ヶ尻正(2011)『ミサ曲・ラテン語・教会音楽ハンドブック』水嶋良雄(1966)『グレゴリオ聖歌』

分析用音源(インターネット上で収集したものについては URL の“http://”部分を省略し, www.youtube.com にあるものは後半の“v=”以降のみを記す: いずれも最終アクセスは 2021 年 3 月)

A1 (聖歌) : Cantori Gregoriani “Messe gregoriane” (CD), Nova Schola Gregoriana “Messe Gregoriane” (CD), v=rkLSiR1QWLA, v=PtCWuG8e9k8, v=ZXT4ffBnr0U, gregorian-chant.ning.com/group/enregistrements/forum/topics/にある以下の音源: coro-vallicelliano-di-roma-messa-de-angelis-in-canto-gregoriano-3, probandi-benedettini-di-s-giovanni-in-parma-messa-de-angelis-mess, coro-pueri-cantores-canto-ambrosiano-45-it-dischi-eco-1013-date-m, scuola-superiore-ambrosiana-milano-serie-a-canti-popolari-delle-m, schola-di-s-giorgio-maggiore-il-canto-gregoriano-ii-lp-it-lec-65-, 同じく 67-, associazione-italiana-s-cecilia-kyriale-simplex-vol-1-33-it-aisc-, coro-della-cappella-papale-di-san-francesco-d-assisi-in-caena-dom, le-congres-gregorien-de-1904, www.facebook.com/Coro-Popolare-Gregoriano-530580293678086/videos/qui-mihi-ministrat-communio-v-domenica-di-quaresima/1637703139632457/

A2 (ミサ) : v=VKbzAONwfSs, v=Kwue5CilD8g, v=Xycy2NVqSj4, v=KGciFBwxTbo, v=GJao0_x4cDw, v=VjhkGezSYpM, v=Row7LRoAxLY, v=I9jwnRo4utI, v=rMprwKXpRI, v=GANAAAL3xcIQ, v=WfDjnp9qog, v=k9QjapFRJPs, v=_un5aQthoe4, v=8gELuDP6CUs, v=6EAunOb1kJI, v=Y9KTSkLIKLo, v=-2AhpRX8hXs, v=T5HTBb31XHW, v=16GtIxp8GJc, v=gk9iioWl_uc, v=_tnOCCnIfo, v=_J_yh52H2g8

B1 (Verdi): v=-jId9rUcndo, v=Et1P_7pCkyQ, v=w9pbly7pgkQ, v=51Y2bdBTY-Q, v=TuCh4SIgy78, v=ddI6jUhr_Xs, v=QPPHaTfeIoI, v=Ko2FHM2udTk, v=XszzZO5tQdk, v=WxGuC9MBWYU, v=R3jrKzHD1gI, v=ANah5FSFXdY, v=albTyg0qOBg, v=iL8v93XFv7E, v=TOGrErsqtJ8, v=BsAtz-j_TxI, v=D1_9vdUOvAw, v=wDGZNYlhFd8, v=JP08Cwc7-84, v=Q435FEEdvMp0, v=TC4GL7z3rFU, v=PmLUuxhRdDg, v=008hTICCAF8, v=Rs4oRY30ymw, v=cHZVfwmlRuU, v=wJv3mcwR85Y, v=8DQg49G_Ows, v=D4Xg0d4GmHE, v=B_foIeeekXk, v=e9zHzIcz5ys, v=FVkAlIKYqzg, v=oXfi9vFt8bw, v=5MtYeCzkIls, v=DsQ7vtjqMGQ, v=_Vq9ceqMPU4, v=8bRhPUcDvJg, v=Sq10LRnG3vA, v=-V4RfxrZLG4, v=fdVKcGluaVA, v=gM395qrAX8Q, v=yvfmYRVWZ0k, v=mpgFeoot0d0, v=RkmgLeXg7qE, v=7v7_Zvjky0, v=wcdTfvNNAF4, v=bh4EXbgewdc, v=mDORZudgwXM, v=V4HAc60LDg0, v=cr4H0jjwvY, v=5ddpmgBeHAg, EMI 7243 5 65506 2 (CD), “Messa Da Requiem” Temirkanov, Orchestra del Teatro Regio di Parma (DVD, Major Entertainment)

B2 (Puccini): v=vD0t9_98S_U, v=YU9GVZ6l5Mc, v=6ImGt68jwks, v=n2zUm9MAqKw, v=d8HaYpEe6P4, v=h3-IAbckDs4, v=eBWwRfCXS1I, v=0zGNkHmEh0w, v=vAi6Ekdk4KA, v=fuzJhH6ryDI, v=QtNFwBb-8vW, v=f9Oh3LW05pQ

C (教皇・枢機卿) : v=o9Pv-UuGUDM, v=J--y-F3ksCw, v=_2zkOPijQxg, v=XqO-GxaO-c0, v=ckKymKow9a4, v=jf87gZbPM8I, v=8n_vozQ_Iq4, v=m8V2l2b-UgI

韓国語母語話者を対象とした日本語のプロソディー研究再考(1)

韓 喜善

要旨 韓国語を母語とする日本語学習者の日本語の音声の問題のうち、本稿では、アクセントについて検討を行なった先行研究を概観した。学習者は日本語のアクセントを適切なパターンで使用されていないという報告とともにその原因について述べ、具体的に次の3点を課題として挙げた。すなわち、(1)日本語のアクセントの弁別において、下り目だけでなく、上がり目も含めてピッチの変化に注目させる必要があること、(2)アクセントの指導において、単に「高」「低」の2段階のみでの説明について、句や文レベルで対応できないこと、(3)学習者が日本語のアクセントを判断する上で、強さや長さなど、高さ以外の韻律的特徴に注目している可能性があり、長さ以外の観点からも調査を行う必要があることの3点である。以上から、系統的な音声教育の基礎となる調査においては、日本語のアクセントについて日本語母語話者の場合とは異なるアプローチが必要であることを指摘した。

1. はじめに

韓国語は日本語¹⁾と統合構造が類似しており、語彙の中に漢字語を多く含むことから、韓国語を母語とする者は日本語の習得において容易な面があると言われている(梅田 1985、関 1989)。その一方で、音声の面においては、分節音、リズム、アクセント、イントネーションについての問題や不自然さが多く指摘されている(加藤 1978、梅田 1985、関 1989、金 1988、松崎 1999、宇都木 2004 等)。しかしながら、教育現場においては体系的かつ具体的に音声の教育ができる人材や教材がともに不足しており、音声の教育に関しては、日本語母語話者の日本語教師が教えれば、学習者も自然に日本語の音声が習得できるはずだという安易な風潮があるようにも思われる。

そこで本稿では、韓国語母語話者で日本語を学習する者(以下、韓国語母語日本語学習者と称する)の日本語の音声上の問題のうち、特にアクセントを扱った論考を概観することで、軽視されがちな日本語の音声教育上の課題と知見を見出し、今後の系統的な音声教育を考える上での基礎的な課題の再検討を行うことを目的とする。

2. 韓国語母語日本語学習者にとっての日本語のアクセント

日本語のアクセントは、自然さや語の弁別に深く関わっている。他方、韓国語は、慶尚道方言や咸鏡道方言のような一部の方言を除けば、示差的アクセントのない無アクセント言語であり、語レベルで規定されたパターンはない(Jun 1993、福井 2000)。そのため、韓国語母語日本語学習者は日本語の学習においてもアクセントに対する意識が希薄であり(大村 1969)、アクセントの概念についても理解が困難

1) 本稿で言う日本語とは、主に東京およびその近郊で話されている日本語を指す。

である。さらに、日本語は語ごとにアクセント型が恣意的に決まっているため、学習者はそれを個別に覚えなければならず、基本的に日本語のアクセントは学習の負担が大きい学習項目だと言える。また、日本語のアクセントは隣接する音との相対的な高さの違いや語中における下がり目の有無によってパターンが決まるが、連続的に変化する人間の声の高さを「低」「高」の2段階に処理することは、無アクセント言語話者にとっては簡単ではないことは想像に難くない²⁾。つまり、単に「高低アクセント」「ピッチアクセント」「高さアクセント」等と言われても、日本語母語話者のような音の高さの処理の仕方自体が、韓国語母語日本語学習者にとって身につけることが容易ではないものであるため、日本語のアクセントの教育においては日本語母語話者の場合とは異なるアプローチを検討していく必要がある。例えば、関 (1989)は、アクセントの下り目だけでなく、上がり目についても教育が必要であるという見解を述べており、松崎・河野 (2010)では、文や句レベルにおいては「高」「低」の2段階だけでは対応できないという見解を示している。

韓国語母語日本語学習者による日本語のアクセントは中高型 (大西 1991、戸田 1999、福岡 2008 等) ないし平板型 (大西 1991、戸田 1999) になる傾向があり、頭高型の生成が困難であるとされている。知覚判断においても、頭高型は他のアクセント型より困難であることが報告されている (李・鮎澤・西沼 1997)。その原因については、韓国語の韻律の影響が考えられる。ソウル方言の場合、アクセント句は基本的に低い音調から始まって上昇し、再び下がるパターンを示すため、日本語の語の生成においてもそのようなパターンになりやすいと考えられる (Jun 1993) ³⁾。このような韓国語母語日本語学習者の日本語の音声は、日本語母語話者にとって違和感を与えるものと考えられる。郡 (2019b)は、標準日本語を話す日本語母語話者による1モーラから3モーラの語の音声に対して、本来と異なるアクセント型に変更した刺激音を標準日本語母語話者に聞かせて自然度を判定させた結果、特に頭高型と他のアクセント型 (尾高型、平板型) に関しては相互のアクセント型が入れ替わった場合に不自然さが際立っていたと報告している。特に、地名など日常的で身近な語であれば、違和感はさらに大きくなるという。梁 (2015)の中国語母語話者による音声に対する日本語母語話者の評価においても同様の結果が示されている。

その一方で、韓国語母語日本語学習者は第1音節が高く話されるとの報告も見られている (大坪 1987、助川 1993)。これについても、アクセント型の誤用の可能性に加え、韓国語の韻律の影響も考えられる。

2) 韓国語母語日本語学習者の日本語の音声は平坦な音調で、ピッチレンジが狭いことも知られている (李 1995、関 1989, 2007)。

3) Jun (1993)によると、ソウル方言のアクセントの最小単位は、アクセント句 (Accentual Phrase) であるという。また、アクセント句の基本音調を高さで表しており (H: 高音調、L: 低音調)、高さは韓国語の韻律を決定づける上で重要な韻律として検討を行なっている。アクセント句とは、1つ以上の単独の語から形成し、一定のピッチパターンによって特徴づけられる単位のことを指す。Jun (1993)は、ソウル方言のアクセント句の基本音調は、1音節の場合、1音節内にLHの両方が現れ、上昇のピッチパターンをとる。2音節のアクセント句では第1音節がLを第2音節がHをとる。3音節のアクセント句では、第1音節がLで、第3音節がHとなり、その間には上昇していく。4音節以上の場合「LHLH」、5音節以上に長くなった場合は第2音節のHと最後からの2音節目のLの間をなだらかに下降していく「LH...LH」という韻律を持つ。

ソウル方言の場合、文頭や句頭において子音のマイクロプロソディー (microprosody) が強化されやすく (Cho and Keating 2001)、平音 (/p, t, k, ts/) と有声音 (/m, n, l/) が来ると、上記で述べたように第1音節は低いピッチの基本的なパターンになるが、激音 (/p^h, t^h, k^h, ts^h/)、濃音 (/p^{*}, t^{*}, k^{*}, ts^{*}, s^{*}/)、摩擦音 (/s, h/) が来ると第1音節のピッチが高くなるパターンになるという (Jun 1993) ⁴⁾。この影響は、日本語の生成 (福岡 2008) だけでなく、知覚判断 (鄭・桐 1996⁵⁾) にも影響があることが報告されている。いずれの場合も、韓国語母語日本語学習者は日本語のアクセントを適切なパターンで使用していないことがわかる。

一方、韓国語でも慶尚道方言は高低アクセントをもつと言われていることから (関 1989、趙 2007)、慶尚道方言話者は日本語アクセント知覚においてピッチの変化に敏感であろうと予想される。鮎澤・小高 (1998) によると、日本語のアクセント型の弁別においては慶尚方言話者はソウル方言話者より正答率が高く、稲田 (2013) でも同様の報告がある。しかしながら、日本語のアクセントの知覚判断においては、慶尚道方言話者であってもソウル方言話者との間に有意差が見られないという報告もある (助川・崔・前川・佐藤 1995)。その原因について、助川・崔・前川・佐藤 (1995) は、音節言語話者はモーラ間の相対ピッチ判断を行うことが難しいためであると考察している。別の原因の可能性として、慶尚道方言は高低アクセントに声調が合わさった特性を持つことが報告されている (姜 2017)。また、ソウル方言においても、プロソディーを構成するものとしては、高さだけでなく、強さや長さ、音節の重さなど、複数の韻律が関わっている可能性がある⁶⁾。

郡 (2019a) は、上級の韓国語母語日本語学習者の音声について調査を行い、日本語の文の読み上げにおいてアクセントとイントネーションの両方が適切に運用されていないことを示した。さらに、アクセントの改善とイントネーションの改善が行われた場合、それらが相乗的に日本語の自然さの評価を高める上で効果をもたらすと述べている。このことは、日本語のプロソディーの学習は、単独での語レベルのみならず、句や文レベルで取り組む必要があることを示している。句や文レベルでの音声上の問題についてもいくつかの報告がある (関 1989, 1994、민 2004、李 1995、宇都木 2004 等) が、これらについては、次稿において検討する予定である。

3. 終わりに

本稿では、日本語のプロソディーのうち、アクセントにおける韓国語母語日本語学習者の特徴を概観した。プロソディーは日本語能力が高くなるにつれて、あるいは学習歴が長くなるにつれて自然に習得されるような性質のものではないという指摘 (민 2004) やその根拠となり得る報告も見られる (郡 2019a)。そのため、学習の初期から日本語のアクセントは語の弁別機能、自然さ、統語機能が関わることに気づ

4) 有声音には有声音の他、母音も含まれる。

5) 鄭・桐谷 (1996) は、語頭に有声音と無声音で始まるミニマルペアについて、F0 を操作した刺激音を作成し、東京出身者と韓国語母語話者に聞かせた。その結果、韓国語母語話者は東京方言話者に比べて F0 の低高に大きく影響されて有声音と無声音を判断する傾向があった。

6) ソウル方言のアクセントの強さと長さを検討した論考として宇都木 (2002, 2006) が挙げられる。

かせることが重要である（金 1988、민 2004）。しかしながら、日本語のプロソディーに関する基礎的な研究は不十分であり、明らかにすべき課題が多い。今後、句や文レベル、さらには談話レベルまたはパラ言語学的なプロソディー研究についても検討し⁷⁾、韓国語母語日本語学習者の音声教育について、総合的な検討を加えていきたい。

参考文献

【日本語による文献】

- 鮎澤孝子・小高京子 (1998) 「『東京語アクセントの聞き取りテスト』 21 言語グループの母語別・成績別正答率」『新プロ「日本語」総括班研究論文集』 1, pp. 57-71.
- 稲田朋晃 (2013) 「ソウル方言話者と慶尚道方言話者による日本語アクセント核のピッチ知覚：知覚の離散性に注目して」『音声研究』 17:1, pp. 6-15.
- 李明姫 (1995) 「韓国人学習者の日本語の疑問文に見られる母語の韻律の干渉」『日本學報』 34, pp. 91-120.
- 李明姫・鮎澤孝子・西沼行博 (1997) 「ソウル出身日本語学習者の東京語アクセントの知覚」『日本學報』 38, pp. 87-98.
- 宇都木昭 (2002) 「朝鮮語ソウル方言のプロソディーの基本構造について」『朝鮮學報』 184, pp. 35-70.
- 宇都木昭 (2004) 「韓国人日本語学習者の日本語におけるフォーカス発話と中立発話の音声的・音韻的特徴」『音声研究』 8:1, pp. 96-108.
- 宇都木昭 (2006) 「朝鮮語ソウル方言のアクセント句におけるインテンシティーの特徴」『実験音声学と一般言語学-城生伯太郎博士還暦記念論集-』, pp. 107-116, 東京堂出版.
- 梅田博之 (1985) 「韓国人に対する日本語教育と日本人に対する朝鮮語教育」『日本語教育』 55, pp. 48-58.
- 大坪一夫監修 (1987) 『日本語の音声(Ⅰ)(Ⅱ)』 アルク NAFL Institute 日本語教師養成通信講座.
- 大西晴彦 (1991) 「韓国人の日本語のアクセントについて」『国際学友会紀要』 15, pp. 52-60.
- 大村益夫 (1969) 「朝鮮語の発音と構造-日本語との比較対照-」『講座日本語教育』 5, pp. 113-129, 早稲田大学語学教育研究所.
- 加藤藤子 (1978) 「韓国人に対する日本語教育」『日本語教育』 35, 日本語教育学会, pp. 65-77.
- 姜英淑 (2017) 『韓国語慶尚道諸方言のアクセント研究』 勉誠出版.
- 金仁炫 (1988) 「韓国人に対する日本語教育法の研究(1)」『教育学研究紀要第二部(教科教育学部門)』 34, pp. 107-112, 中国四国教育学会.
- 郡史郎 (2019a) 「じょうずな読みとアクセント, イントネーション-非母語話者の読みの改善例-」『言語文化研究』 45, pp. 179-190.
- 郡史郎 (2019b) 「アクセントとイントネーションの逸脱に対して感じる違和感について」『言語文化共同研究プロジェクト 2018』, pp. 17-28.
- 助川泰彦 (1993) 「母語別に見た発音の傾向」『日本語音声と日本語教育』 文部省重点領域研究成果報告書.
- 助川泰彦・崔絢・前川喜久雄・佐藤滋 (1995) 「韓国人日本語学習者によるアクセント知覚と音節構造に

7) 例えば、韓国語母語日本語学習者は、日本語の疑問文の上昇調が下降調になることが報告されており（加藤 1978）、例えば「どこへ行きますか」の文末を上げずに下げて生成するため、詰問調に聞こえてしまうという。

- 関する考察』『電子情報通信学会技術研究報告. SP 音声』 95:41, pp. 61-66.
- 鄭恩禎・桐谷滋 (1996)「ピッチパターンが日本語の有声・無声の弁別に与える影響：韓国語母語話者と日本語母語話者の比較」『音声研究』 2:2, pp. 64-70.
- 趙義成 (2007)「慶尚道方言とソウル方言」『韓国語教育論講座』 1, pp. 203-219, くろしお出版.
- 戸田孝子 (1999)「日本語学習者による外来語使用の実態とアクセント習得に関する考察-英語・中国語・韓国語話者の会話データに基づいて-」『文藝言語研究 言語篇』 36, pp. 89-111.
- 福井玲 (2000)「韓国語のアクセント」『音声研究』 5:1, pp. 11-17.
- 福岡昌子 (2008)「韓国人日本語学習者のアクセント習得における母語干渉-語頭破裂音を含む語のアクセント-」『三重大学国際交流センター紀要』 3, pp. 45-59.
- 松崎寛 (1999)「韓国語話者の日本語音声-音声教育研究の観点から-」『音声研究』 3:3, pp. 26-35.
- 松崎寛・河野俊之 (2010)『日本語教育能力検定試験に合格するための音声』 23, アルク.
- 関光準 (1989)「韓国語話者の日本語音声における韻律的特徴とその日本語話者による評価」『日本語教育』 68, pp. 175-190, 日本語教育学会.
- 関光準 (1994)「韓国語疑問文イントネーションの音響的分析と合成音声による知覚実験-日本語との対照研究のための基礎的資料として-」『音声学会会報』 205, pp. 29-33.
- 関光準 (2007)「韓国語ソウル方言のイントネーション」『音声研究』 11:2, pp. 16-27.
- 梁辰 (2015)「アクセントの誤用パターンが自然度評価に与える影響の比較」『第 29 回日本音声学会全国大会予稿集』, pp. 122-127.
- 【英語による文献】**
- Cho, T., P. Keating (2001) “Articulatory and acoustic studies on domain-initial strengthening in Korean,” *Journal of Phonetics* 29:2, pp.155-190.
- Jun, S. (1993) “The Phonetics and Phonology of Korean Prosody,” Ph. D. dissertation, Ohio State University.
- 【韓国語による文献】**
- 민광준 (2004) 한일 양 언어 운율의 음향음성학적 대조 연구, J&C.

A study on word-final vowel reduction in American English¹

Takeshi Yamamoto

Summary. In American English, word-final [ju:] and [oo] in penultimately-stressed words such as *value* and *follow* sometimes reduce, which is occasionally described in the literature. This paper discusses, based on the data retrieved from a database on a dictionary, under what conditions this phenomenon is likely to occur and reveals that the reduction most likely occurs when the preceding stressed syllable is monomoraic and the onset of the syllable in question is a coronal, especially a coronal sonorant. This leads us to consider that monomoraic stressed syllables deprive the following syllable of its onset, which results in its reduction and that this resyllabification will more likely occur, the lighter is the relevant consonant.

1. Introduction

Wells (1990) admits the following five levels of stress in English.

- (1) Stress levels (Wells 1990: 80–1)
 1. Primary word stress
 2. Pre-tonic secondary stress
 3. Tertiary (post-tonic) stress
 4. Unstressed but with full vowel
 5. Weak (reduced) vowel

substitution product 2, 5, 1, 5, 3, 4

In transcribing the penult of *dictionary* in American pronunciation or the ultima of *magazine* when antepenultimately stressed, *Longman Pronunciation Dictionary* (Wells 2008; henceforth, *LPD*) puts no stress mark on the syllables, which means that Wells regards them as having level 4 stress, but *Webster's Ninth New Collegiate Dictionary* (Merriam-Webster 1983/1990; henceforth, *WNNCD*) puts a secondary stress mark on the relevant syllables. This

1) This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number 17K02832.

makes a clear contrast to level 2 stress, which both dictionaries mark with a secondary stress sign.

(2) Level 3 or 4 stress (underlines added)

	<i>WNNCD</i>	<i>LPD</i>
a. dictionary	\ 'dik-shə- <u>ner</u> -ē\	['dɪkʃə <u>ner</u> i]
b. magazine	\ 'mag-ə- <u>zēn</u> \	['mæg ə <u>zi:n</u>]
	<i>Cf.</i> \ <u>mag</u> -ə-'zēn\	[<u>mæg</u> ə 'zi:n]

When we survey *WNNCD*'s stress notations, we notice two other characteristics not found in *LPD*. The first of them is its frequent use of parentheses enclosing a secondary stress sign.

(3) Level 3, 4, or 5 stress

	<i>WNNCD</i>	<i>LPD</i>
a. synecdoche	\sə-'nek-də-(,)kē\	[sɪ 'nek də ki]
b. nephew	\ 'nef-(,)yü\	['nef ju:]
c. volcano	\vəl-'kā-(,)nō\	[vɑ:l 'keɪn ou]
d. district	\ 'dis-(,)trɪkt\	['dɪs trɪkt]
e. product	\ 'präd-(,)əkt\	['prɑ:d ʌkt, -əkt]
f. subject	\ 'səb-jɪkt, -(,)jekt\	['sʌb dʒekt, -dʒɪkt]

The use of parentheses helps distinguish strong and weak vowels, because *WNNCD* uses identical symbols for both members of the five strong–weak vowel pairs, three of which *LPD* distinguishes using vowel symbols.² However, transcriptions such as (3f) convince us that *WNNCD* admits two levels of stress for Wells's level 4.

(4) Strong and weak vowels

	<i>WNNCD</i>	<i>LPD</i>	
		Strong	Weak
a.	\ē\	[i:]	[i]
b.	\yü\	[ju:]	[ju]
c.	\ə\	[ʌ]	[ə]

2) For stress environments each of the vowel phonemes in American English occurs in, see Hayes (1995: 12–16).

d. \i\	[ɪ]	[ɪ]
e. \ō\	[oʊ]	[oʊ]

The other characteristic of *WNNCD*'s stress transcription is that it sometimes shows possible reduction on word-final \yü\ and \ō\, i.e., [ju:] and [oʊ] in the IPA, respectively,³ in penultimately-stressed words as exemplified in (5). Reduced forms never appear in the ultimas of antepenultimately-stressed words as in (6),⁴ which is understandable in terms of the trochaic nature of English rhythm.

(5) Level 3, 4, or 5 stress on the ultimas of penultimately-stressed words

	<i>WNNCD</i>	<i>LPD</i>
a. value	\'val-(,)yü, -yə(-w)\	['væl ju:, -ju]
b. follow	\'fāl-(,)ō, -ə(-w)\	['fɑ:l oʊ]

(6) Level 3 or 4 stress on the ultimas of antepenultimately-stressed words

	<i>WNNCD</i>	<i>LPD</i>
a. avenue	\'av-ə-,n(y)ü\	['æv ə nu:, -nju:]
b. radio	\'rād-ē-,ō\	['reɪ di oʊ]

WNNCD gives the following explanation to such transcriptions as in (5), indicating that the reduction depends on the individual word.

(7) *WNNCD* (p. 36)

“In some words having final \(.,)ō\, as *follow*, \(.,)yü\, as *value*, or \(.,)ü\, as *statue*, an unstressed variant \ə\ or \yə\ may occur, especially before a consonant or a pause, as in \'fāl-əd\ or \'val-yəd\, and a variant \ə-w\ or \yə-w\ occurs before vowels, as in \'fāl-ə-wiŋ\ or \'val-yə-wiŋ\ . These variants are transcribed \ə(-w) \ or \yə(-w)\ at the entry word.”

This paper discusses under what conditions [ju:] and [oʊ] reduce by surveying *WNNCD*'s transcriptions of the words retrieved from a word database.

3) For the integrity of [ju:] as a vowel, see Davis & Hammond (1995).

4) This fact is evidenced by Hammond (1999: 257).

2. Descriptions in the literature

The reduction of [ju:] and [oʊ] is occasionally described in the literature. Wells mentions the following for the southern variety of American English.

(8) Wells (1982: 552)

“It is unusual to hear unstressed final-syllable /u ~ ɪu/ in southern speech, except in the form of a schwa [ə] or its rounded equivalent [ɘ]. Thus *volume* is ['vɑ(l)jəm], *continue* [kən'tɪnjə]. Before a vowel, [w] is inserted, thus [kən'tɪnjəwɪŋ]. Final /oʊ/ can also be weakened in this way, as in *follow* ['falə ~ 'falə], *following* ['faləwɪŋ]; but in southern mountain speech there is also the (stigmatized) possibility of [ə], thus ['falə ~ 'faləɪn].”

Keyon and Knott give a phonetic description of the word-final vowel spelled *ow* in the following way.⁵

(9) Keyon and Knott (1944/1953: “-ow”)

“-ow suffix -o, -ö, -ə. The ending -ow is seldom pronounced (except with artificial care) with a full o as in elbow. The commonest pron. are with an advanced ö, nearly like u, and with ə. ö differs from ə chiefly in its lip-rounding. . . . When a vowel follows the -ə (as in -ing, -er) a w or r intervenes; as follow 'falə, following 'faləwɪŋ or 'faləɪŋ. An ö sound, nearly u, is also heard in medial syllables of such words as whatsoever.”⁶

Although the /ɪ/ form, ['falə ~ 'faləɪn] in (8) and ['faləɪŋ] in (9), can be regarded as restricted in southern speech, the [w] form seems to be prevalent outside the region. Furthermore, Kenyon and Knott's description in (9) very likely applies to such words spelled otherwise as *mosquito* and *borough* listed in (18) below, whose ultimas *WNNCD* transcribes in the same way.

Bolinger (1986: 348) claims that the pair of words in (10a), admitting that not all speakers will agree, is distinguished only by the contrast between a reduced vowel and a similar-sounding full vowel, with the words in (10b) given as a near-minimal pair. He also makes a remark that “the Merriam dictionaries” (Bolinger 1986: 359) or “the *Collegiate Ninth*” (Bolinger 1998: 65), i.e., *WNNCD*, makes this distinction.

5) See also Kenyon (1994: 192–3).

6) Although they give no such variant under “whatsoever,” they give unstressed **so**, **sə**, **su** under “so.”

(10) Bolinger (1986: 348)

	Reduced [ə]	Full [o]
a.	farrow	Pharaoh
b.	gallows	aloes

3. Phonological environments

To reveal what causes the reduction of the two vowels, penultimately-stressed words ending with /ju:/ or /oo/ were retrieved from a database on Landau (2000), henceforth *CDAE*, and classified according to the stress level *WNNCD* gives to the relevant syllable. The results are summarized in (11) and (12).

(11) *CDAE* / (j)u:/

a.	Level 3 stress	\,(y)ü\	4 entries
b.	Level 3 or 4 stress	\,(.) (y)ü\	6 entries
c.	Level 3, 4, or 5 stress	\,(.) (y)ü, (y)ə(-w)\	10 entries

(12) *CDAE* /oo/

a.	Level 3 stress	\,ō\	8 entries
b.	Level 3 or 4 stress	\,(.)ō\	127 entries
c.	Level 3, 4, or 5 stress	\,(.)ō, ə(-w)\	37 entries

In what follows, we will survey the data and reveal that, although we will not obtain significant results concerning the reduction of /ju:/ probably because of the scarcity of pertinent entries, the reduction of /oo/ is affected by the weight of the preceding syllable and the onset of the syllable in question.

3.1 [ju:]

There are few entries in *CDAE* which have penultimate stress and end with /ju:/. Of these, *WNNCD* puts unparenthesized secondary stress marks on the final syllable of the following items.

(13) \,(y)ü\ in *WNNCD*

- a. Heavy penults (3 entries)
debut, mildew, preview
- b. Light penult (1 entry)
venue

The ultima of *preview* consists of a free morpheme; that of *mildew* is etymologically a word, *dew*. *Debut* has an alternant with primary stress on the ultima, which is often the case with French borrowings. The penultimately-stressed variant in (13a) seems to have derived from a variant with final stress through rhythm reversal. Considering that the less prominent constituent word usually has a relatively strong stress in two-term compounds, it would be natural that a relatively strong stress is placed on the part of the word which corresponds to a free morpheme or which used to be, or is, by other speakers, primarily stressed.

There is only one entry, *venue*, classified into (13b). This word, if syllabified strictly on the basis of onset maximality, will have a light penult, thus categorized as such above. However, *WNNCD* only gives the form \ˈven-,yü\, with yod retained, which means that, as the dictionary indicates in the transcription, its penult has been made heavy through the resyllabification of the [n] to the preceding syllable. However, *menu*, which also has a yod-dropped variant not shown, has a secondary stress mark parenthesized as in (14b); *sinew* has possible reduction indicated in a yod-retained variant as *continue* as in (15b), but the word also has a yod-dropped variant \ˈsin-(,)ü\ labeled “*also*” without reduction shown. It is likely that non-phonological factors such as frequency also affect the stress levels.

(14) \,(,)yü\ in *WNNCD*

- a. Heavy penults (3 entries)
curfew, impromptu, rescue
- b. Light penults (3 entries)
cashew,⁷ menu, nephew

(15) \,(,)yü, (y)ə(-w)\ in *WNNCD*

- a. Heavy penults (2 entries)
argue, virtue
- b. Light penults (6 entries, with the 2 parenthesized items excluded)
continue, (discontinue), issue, (reissue), sinew, statue, tissue, value

Many of the entries with the indication of possible reduction have a light penult as in (15b). With *argue* excepted, all of the words in (15) have a coronal consonant before /j/, though /tj, sj/ have become palato-alveolars through Yod Coalescence.

7) *CDAE* and *WNNCD* also show an iambic variant.

3.2 [oʊ]

Let us turn to the other vowel, for which *CDAE* has many more entries than for /ju:/.

3.2.1 *WNNCD* \,ō\

The number of the entries is relatively small with their ultimas given an unparenthesized secondary stress sign. These entries are divided into the following two groups.

(16) *WNNCD* \,ō\

- a. Compounds (5 entries)
cornrow, outflow, rainbow, scarecrow, tiptoe
- b. Heavy penults (3 entries)
elbow, macho, pronto

The words in (16a) are clearly compounds, whose second members receive level 3 stress; those in (16b), of which *elbow* would be comparable to *mildew* in (13a), are not compounds, but their second syllables are given the same degree of stress.

What places a relatively heavy stress on the ultima of the words in (16b)? We can attribute it to the syllable structure as the label shows above, whose effect was not sufficiently clear in the cases of /ju:/.

3.2.2 *WNNCD* \(.)ō\

Many of the entries with word-final ¥ō¥ have a parenthesized secondary stress sign.

(17) \(.)ō\

- a. Compound (1 entry)
say-so
- b. Heavy penults (103 entries)
albino, also, alto, Anglo, auto, avocado, banjo, bimbo, bingo, bongo, bozo, bravado, bravo, bronco, bureau, burrito, calypso, cappuccino, cargo, casino, Chicano, cocoa, combo, commando, concerto, condo, contralto, credo, crescendo, de facto, depot, disco, duo, ego, embargo, euro, expo, fiasco, flamingo, furlough, gazebo, gazpacho, gizmo, gringo, gumbo, gusto, halo, hero, hobo, info, innuendo, intro, ipso facto, judo, jumbo, kilo, Latino, Leo, limbo, limo, lingo, logo, machismo, maestro, mango, manifesto, memento, mumbo jumbo, Negro, oboe, pesto, photo, placebo, Pluto, polo, poncho, porno, psycho, pueblo, rhino, salvo, schizo, silo, solo, soprano,

staccato, taco, tango, tempo, tornado, torso, trio, tuxedo, typo, Velcro, veto, Virgo, virtuoso, volcano, weirdo, wino, yo-yo, zero

c. Light penults (23 entries)

ammo, armadillo, cello, ditto, demo, echo, espresso, falsetto, ghetto, grotto, hippo, Jell-O/jello, lasso,⁸ libretto, memo, metro, mono, motto, piano, sombrero, stucco, tarot, wacko

Most of the entries in (17) are spelled with a final *o* and have Romance or Latin origin or are abbreviations, with *furlough* being a rare exception. The vowel in question is regarded as a suffix in some of the cases.

As for syllable structure, most of them have a heavy penult as in (17b), and the number of those with a light penult is relatively small as in (17c). The latter group includes *grotto*, *mono*, and *motto*, whose first vowel, [ɑ:], was originally the monomoraic LOT vowel, as classified here, but is now the bimoraic PALM vowel.⁹ Note that the trisyllables *armadillo*, *falsetto*, *libretto*, *espresso*, *sombrero*, and *piano* do not follow the Latin Stress Rule. This may indicate that they have geminate consonants, which make their penults heavy.

3.2.3 WNNCD \(.̩, ə(-w)\

WNNCD indicates possible reduction for the following entries.

(18) \(.̩, ə(-w)\

a. Heavy penults (5 entries)

mosquito, potato, tomato, torpedo, window

b. Light penults (29 entries, with the 2 parenthesized items excluded)

arrow, borough, borrow, bellow, billow, burrow, fellow, follow, (foreshadow), furrow, hollow, marrow, meadow, mellow, minnow, narrow, (overshadow), pillow, sallow, shadow, shallow, sorrow, sparrow, swallow, thorough, tobacco, tomorrow, wallow, widow, winnow, yellow

c. Heavy or light penult (1 entry)

mulatto

Many of the entries in (18) are of Germanic origin; however, more importantly, they have light penults. One entry, *mulatto*, allows [ɑ:] as its first vowel in addition to [æ]. The first

8) CDAE and WNNCD give other variants that do not pertain to this discussion.

9) LOT and PALM are Wells's standard lexical sets (1982: §§2.1, 2.2).

vowel of *borough*, *burrow*, *furrow*, and *thorough* is [ə:] or [ʌ],¹⁰ the first of which is regarded as containing an underlying /ʌ/. *Borrow*, *follow*, *hollow*, *sorrow*, *swallow*, *tomorrow*, and *wallow* originally had monomoraic LOT vowels.

Most of the onsets of the ultimas of the words in (18) are coronals, many of which are sonorants. The only exception is *tobacco*, in which the consonant in question is a dorsal obstruent.

4. Discussion

4.1 The Arab Rule

The effect of the weight of the preceding syllable on vowel reduction can be described by what is frequently referred to as the Arab Rule, which is named after the regularity found between the usual pronunciation of *Arab* and an allegedly possible pronunciation with [eɪ] as the first syllable. The rule, which is more exactly a tendency, says that a syllable following a stressed light syllable reduces, but that a syllable following a stressed heavy one does not. This regularity is pointed out by James L. Fidelholtz, who is quoted by, e.g., Chomsky & Halle (1968: 146, fn. 100), Ross (1972: 256–7), Hayes (1990: 121), and Burzio (1994: 91 and elsewhere).

(19) Ross (1972: 256)

Arab [æ¹rə⁰b ~ ĕy¹ræ³b]¹¹

It is very likely that the stress variations we saw in the previous section reflect this tendency, as exemplified below by the entries classified into two extreme groups: those transcribed with an unparenthesized secondary stress sign and those transcribed with possible reduction indicated.

(20) Vowel reduction corresponding to the two variants of *Arab*

a. ['eɪ,ɹæb]

\,(y)ü\ debut, mildew, preview

\,ō\ elbow, macho, pronto

b. ['æɹəb]

\,(.)y)ü, (y)ə(-w)\ continue, issue, sinew, ...

\,(.)ō, ə(-w)\ arrow, borough, bellow, ...

10) *WNNCD* also gives *thorough* ʔôrʔ, i.e., [ɔə] in the IPA, with the label “sometimes.”

11) The numbers indicate stress levels, where 0 refers to unstressed.

4.2 Consonant weight

Another factor that affects the stress level, or reduction, is the onset of the relevant syllable. This is more readily attested in (18), where all the words except *tobacco* have an alveolar as the onset of the ultimas, and most of the alveolars are sonorants.

Ross (1972: 250–4) argues that nouns ending with “nondental” obstruents¹² [p, b, tʃ, k, g, f, v, ʃ, ʒ] have stress in their final syllable, but that those ending with other consonants may lose stress. In other words, ultimas closed by either a “dental” or a sonorant may reduce.

(21) Adapted from Ross (1972: 250–4)

a. Nouns ending with “nondental” obstruents

	Unreduced	/ Reduced		Unreduced	/ Reduced
[p]	handic <u>ap</u>	/ —	[b]	shishkab <u>ob</u>	/ —
[tʃ]	tsarev <u>itch</u>	/ —			
[k]	tomah <u>awk</u>	/ —	[g]	polly <u>wog</u>	/ —
[f]	fistic <u>uff</u>	/ —	[v]	cyto <u>flav</u>	/ —
[ʃ]	succot <u>ash</u>	/ —	[ʒ]	camou <u>flage</u>	/ —

b. Nouns ending with other consonants

	Unreduced	/ Reduced		Unreduced	/ Reduced
[t]	baccar <u>at</u>	/ idiot <u>ʔ</u>	[d]	katy <u>did</u>	/ Ili <u>ad</u>
			[dʒ]	—	/ pilgrim <u>age</u>
[θ]	opsim <u>ath</u>	/ azim <u>uth</u>			
[s]	sassafr <u>ass</u>	/ syllab <u>us</u>	[z]	alvelo <u>z</u>	/ —
[m]	diad <u>em</u>	/ modic <u>um</u>	[n]	carav <u>an</u>	/ alien
[l]	alcoh <u>ol</u>	/ capit <u>ol</u>	[ɹ]	samov <u>ar</u>	/ integ <u>er</u>

Ross (1972: 252–3) states that there are no ultimately-stressed polysyllables that end with [dʒ] and argues that [ʒ] and [dʒ] are different realizations of the same segment. However, all his examples, *mucilage*, *pilgrimage*, and *advantage*, are regarded as containing a nominalizing suffix *-age*, which may indicate that suffixes tend to be destressed irrespective of the weight of their codas. It is possible that the lack of subsidiarily-stressed ultimas ending with [dʒ] is an accidental gap similar to those ending with [z], concerning which Ross (1972: 251) says he could not find any antepenultimately-stressed nouns.

12) English [t, d, s, z] are normally alveolars, but the label “dental” is considered to be intended for the exclusion of palato-alveolars.

If we count [dʒ] as heavy, Ross's dichotomy can be straightforwardly related to sonorancy and major place features, i.e., labiality, coronality, and dorsality, as in the following. We assume that palato-alveolars have both [COR] and [DOR].

(22) Heavy codas and light codas

a. Heavy codas

[p, b, f, v] = [−son, LAB]

[k, g] = [−son, DOR]

[tʃ, ʃ, dʒ, ʒ] = [−son, COR, DOR]

b. Light codas

[t, d, θ, s, z] = [−son, COR]

[m] = [+son, LAB]

[n, l, ɹ] = [+son, COR]

The above classification of consonants produces the following three inequations of feature weight, which indicates that obstruency, labiality, and dorsality contribute more to syllable weight.

(23) Inequations of feature weight

a. [−son] > [+son]

b. [LAB] > [COR]

c. [DOR] > [COR]

Given the above inequations, we can roughly categorize coda consonants by weight into the following four groups.

(24) Consonants roughly classified by weight

a. [p, b, f, v] = [−son, LAB]

[k, g] = [−son, DOR]

[tʃ, dʒ, ʃ, ʒ] = [−son, COR, DOR]

b. [t, d, θ, s, z] = [−son, COR]

c. [m] = [+son, LAB]

d. [n, l, ɹ] = [+son, COR]

The consonants in (24a) are the heaviest, and those in (24d) are the lightest. It is not clear which of the remaining two groups, the coronal obstruents or the labial sonorant, is the

heavier.¹³ Regardless, relatively light consonants in the onset, particularly coronal sonorants, are related to the reduction of the syllable.

4.3 Onset-sensitivity

Why do light onsets trigger reduction? It is widely accepted that the rhyme contributes to syllable weight, but not the onset. However, Gordon (2005: 598) lists the following thirteen languages including English as exceptions to this established view.

(25) Gordon (2005: 598)

Alyawarra	CV > (W)V
Arrernte	CV > V
Banawá	CV > V
Bislama	CCVC > CVC > CCV > CV
English	CVV, CVC > O(R)V > RV
Iowa-Oto	CV > V
Júma	CV > V
Lamalama	CV > V
Manam	(C)VC > CV > V
Mbabaram	(C)VC > CV > V
Nankina	CCV > (C)V
Pirahã	KVV > GVV > VV > KV > GV
Tümpisa Shoshone	CVV > KV > GV

K = voiceless consonant

G = voiced consonant

W = glide

R = sonorant

O = obstruent

Gordon's claim that English is "onset-sensitive" is based on Nanni (1977), who argues that the suffix *-ative* may lose its subsidiary stress when preceded by either a vowel or a sequence composed of a vowel plus a sonorant as in (26b) and that this is not observed when preceded by either a "nonsonorant" or a consonant cluster as in (26a). It is plausible,

13) However, it is interesting to note that no words containing intervocalic [m] are found in (18) above, (26b) below, or Wells's (1995) sonorant left capture examples to be discussed in §4.4.

therefore, that the reduction we are discussing also depends on the weight of the onset of the ultima.

(26) The suffix *-ative* (Nanni 1977: 757; underlines added)

a. Non-reducible: [-,əɪtɪv]

innovative, qualitative, investigative, administrative, legislative, aggravative,
irritative, interpretative, elucidative

b. Reducible: [-,əɪtɪv ~ -ətɪv]

nominative, imaginative, ejaculative, iterative, agglomerative, initiative, palliative,
cumulative, agglutinative, generative, manipulative, terminative, operative,
remunerative

4.4 Sonorant left capture and bimoraicity

We saw in the previous two subsections that syllable reduction is affected both by rhythm, specifically the Arab Rule, and by onset weight. However, whether these two factors are interrelated is unclear.

With regard to sonorants, Wells (1995: 408–9) proposes a process which he calls “sonorant left capture” to account for syllabic sonorant formation before a stressed syllable. In the following derivation, [l] is syllabified into the preceding unstressed syllable even though the following vowel is full, which does not conform to the syllabification principles Wells (1990) proposes.

(27) A derivation for *catalogue* (Wells 1995: 408)

underlying representation	'kætəlɒɡ
syllabification	'kæt.əlɒɡ
sonorant left capture	'kæt.əl.ɒɡ
syllabic consonant formation	'kæt.ɫ.ɒɡ

Sonorant left capture is a resyllabification process, by which a sonorant onset is resyllabified into the coda of the preceding syllable. Interestingly, none of the examples Wells gives concerns [m],¹⁴ which might mean that this sort of resyllabification is actually not restricted to sonorants in general but that light consonants tend to be resyllabified leftward. Note that resyllabification also accounts for Nanni’s examples in (26).

14) Refer to the discussion in §4.2.

The reason that sonorant left capture occurs is unclear, though it is plausible that it is a kind of articulatory anticipation. However, as for the reduction we are discussing, there is no doubt that the bimoraicity constraint on stressed syllables plays an important role, which requires that stressed syllables be bimoraic.¹⁵

When the stressed syllable of a trochaic foot ends with a monomoraic vowel, the onset of the following syllable is resyllabified into the coda of the preceding to satisfy the bimoraicity of the preceding stressed syllable. This causes the following syllable to be onsetless, which reduces the weight of the syllable and results in its reduction.¹⁶

(28) The Arab Rule accounted for by bimoraicity and reduction

Arab [ˈæɪ.əb ~ ˈeɪ.ɪəb]

It is conceivable that how likely this resyllabification occurs is affected by the weight of the resyllabified consonant: the lighter the consonant, the more likely it will be resyllabified. This may account for the fact that most of the words classified into (18b) above have an intervocalic coronal sonorant. This is illustrated in the following, where [ju] and [o] represent the reduced forms of [ju:] and [oʊ], respectively.

(29) Bimoraicity and resultant reduction

a. Stressed bimoraic syllables

\,yü\ debut [ˈdeɪ.ɪbju:]

\,õʔ elbow [ˈɛl.ɪboʊ]

b. Stressed monomoraic syllables

\(,)yü, yə(-w)\ continue [kən.ˈtɪ.(,)nju:] → [kən.ˈtɪn.ju]

\(,)õ, ə(-w)\ arrow [ˈæ.(,)ɪoʊ] → [ˈæɪ.o]

5. Conclusion

We argued that word-final [ju:] and [oʊ] in penultimately-stressed words most likely reduce when the preceding stressed syllable is light, i.e., monomoraic, and the onset of the syllable in question is a light consonant, especially a coronal sonorant. We then argued that the reduction occurs as a result of a resyllabification process the preceding stressed monomoraic syllable requires, by which the following syllable loses its onset and reduces.

15) See Hammond (1999: 218 and elsewhere).

16) Burzio (1994: §5.5) argues in a different context that syllables without an onset are lighter than those with an onset.

We also claimed that the resyllabification will more likely occur, the lighter is the pertinent consonant.

References

- Bolinger, Dwight (1986) *Intonation and its parts: Melody in spoken English*. Stanford University Press.
- Bolinger, Dwight (1998) “The double triangle: Two kinds of vowels in English.” In Bronstein, Arthur J. (ed.), *Conference papers on American English and the International Phonetic Alphabet* [Publication of the American Dialect Society 80], 61–66. University of Alabama Press.
- Burzio, Luigi (1994) *Principles of English stress*. Cambridge University Press.
- Chomsky, Noam & Morris Halle (1968) *The sound pattern of English*. Harper & Row.
- Davis, Stuart & Michael Hammond (1995) “On the status of onglides in American English.” *Phonology* 12(2), 159–82.
- Hammond, Michael (1999) *The phonology of English: A prosodic optimality-theoretic approach*. Oxford University Press.
- Hayes, Bruce (1995) *Metrical stress theory: Principles and case studies*. The University of Chicago Press.
- Kenyon, John Samuel (1994) *American pronunciation*, 12th ed., expanded. Donald M. Lance & Stewart A. Kingsbury (eds.). George Wahr.
- Kenyon, John Samuel & Thomas Albert Knott (1944/1953) *A Pronouncing Dictionary of American English*. Merriam-Webster.
- Landau, Sydney I. (2000) *Cambridge Dictionary of American English*. Cambridge University Press.
- Merriam-Webster (1983/1990) *Webster’s Ninth New Collegiate Dictionary*. Merriam-Webster.
- Ross, John Robert (1972) “A reanalysis of English word stress (Part I).” In Brame, Michael K. (ed.), *Contributions to generative phonology*, 229–323. The University of Texas Press.
- Wells, John C. (1982) *Accents of English*, 3 vols. Cambridge University Press.
- Wells, John C. (1990) “Syllabification and allophony.” In Ramsaran, Susan (ed.), *Studies in the pronunciation of English: A commemorative volume in honour of A. C. Gimson*, 76–86. Routledge.
- Wells, John C. (1995) “New syllabic consonants in English.” In Lewis, Jack Windsor (ed.), *Studies in general and English phonetics: Essays in honour of Professor J. D. O’Connor*, 401–12. Routledge.
- Wells, John C. (2008) *Longman Pronunciation Dictionary*, 3rd ed. Pearson Education.

執筆者一覧（2021 年 3 月現在）

安部 麻矢	大阪大学マルチリンガル教育センター特任講師
郡 史郎	大阪大学名誉教授
韓 喜善	大阪大学国際教育交流センター特任講師
山本 武史	大阪大学大学院言語文化研究科准教授

言語文化共同研究プロジェクト 2020

音声言語の研究 15

2021 年 5 月 31 日発行

編集発行者 大阪大学大学院言語文化研究科

